

---

# 楽園～私の居場所～

宝玉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

楽園〜私の居場所〜

### 【Nコード】

N9960C

### 【作者名】

宝玉

### 【あらすじ】

友達ができない、如月セト。そのわけは、親の都合による転校だった。しかし、ある学園に来てからというもの、彼女の人生が変わった……。微妙にファンタジーです。展開が早いかもしれませんが、徐々に直したいと思います。しばらく更新停滞します。復帰未定

## プロローグ 葉巻学園

「ここが私の新しい学校、ですよね？」

とある学園にのんびりとした女の子が転校してきた。彼女の名は如月セト。そののんびりした性格のわりには、わりとしっかりした名前だった。

ここは、葉巻学園。にぎやかで、あきない学園として有名だった。セトは、両親の仕事の都合でこの学園にくることになった。これまでも何度も転校をくりかえし、友達が全くと言ってもいいほどできなかった。

今度は友達ができるかと、楽しみにしていた。

「……中に入っても、よろしいんですかね？」

セトは一人でぶつぶついいながらもさっさと靴を脱ぎ、どんどん中へと入っていった。

靴箱を抜けると、そこは真っ白に染まった廊下。

広々としていた。ほかの教室も賑やかだったが、近くの教室からはもつとにぎやかな声が聞こえてきた。5年生の教室からのもつた。セトの入るクラスだ。セトは歩いて5年生の教室の前まで近づいた。

「よし、みんな、新しい友達だぞ！」

先生がちらつとこつちを見た。セトは緊張して、足が震えていた。

「えーっ、だれだろう？」

「はいってこい、如月！」

「はいー……」

セトはゆっくり教室に入っていた。そして中央のところまでくると、ぴつたりとまって正面を見た。きれいなその、紫色の瞳で

クラスのみんなを見つめた。

「えーっと、如月セトです。転校、転校の繰り返しで、友達があまりできなかったんです。この学園には少し長くいられるとおもうんで、その間だけ、ここで、仲良くさせてください」

セトは、今までより少し早い口調で話した。だが、とても緊張していた。みんなと友達になれるかが心配で、心配でたまらなかった。みんながセトを不思議そうな目でみているのだった。

「よろしくやってくれ。如月に質問は？」

「はいはい、質問じゃねえんだが、言うぜ。緊張しなくなっっていぜ！ 別にいじめたりしねえよ！」

「そうだよ！ これからよろしくね！」

とたんに教室中が拍手と歓声に包まれた。セトは真っ赤になってうつむいた。しかし、その顔は笑っていた。今までに見せたことのないようなにこにこした笑いだった。

「ありがとう！ 私はゆっくりすぎてついてこれないかもだけど、よろしく願います」

セトの楽しい学校生活は今、幕をあけた。

## 第1話 友

「如月……さんだよな？」

「ん？ あ、えつと……」

「あ、ごめんごめん。あたし、音羽ひのり！ よろしくね！」

セトは突然顔を突き出してきたひのりに驚いていた。ひのりは黒く長い髪をポニーテールに縛って、赤いカーディガンを羽織っていた。なんとも存在感が強いイメージがした。

「こんにちは、わたしは飛鳥ルナ。こいつは馬鹿だから気にしないでいいぞ」

ルナと名乗る少女が、ひのりを指差した。

「なんでなのお！ セトちゃん、ルナだって気にしないでいいよ！」

「わたしは本当のことを言っただけだ？」

ルナはあくまでも言い返す。

「くっそ……」

「はいはい、けんかはお止め。私は青菜るい。この人たちはドタバタコンビって言われるほどの仲なのよ。うふふ、よろしくね」

ひのりとルナはドタバタコンビ、るいはお姉さんの存在、なのだろう、セトから見ると。そのうち、ひのりが口を開いた。

「あ、如月さんっ！ セトってよんで良い？」

「はい！ もちろんです！」

セトは、待つてました！ と言わんばかりに、目を輝かせた。

「じゃあ、セト。あんた、いい所に此处に来たね！ あした、宿泊体験学習なんだよ！」

「ああ、そうだったな。よかったら、いつしよに班をつくらないか？」

「うん、いいわね！ セトちゃんもいつしよがいいわ」

セトは嬉しかった。友達が一人もできなかった自分が、1日目でこんなにも友達ができるなんて思ってもいなかった。しかも明日の宿泊体験の班に入れてもらえるのだ。こんなに嬉しいことなんて、無い。

「あ、あ、その……」

「ん？」

3人は声をそろえて言った。セトが恥ずかしそうに下を向いて言った。

「あ、ありがとうございます……」

「だって、あたしたちは友達だよ！」

「そうだな、友達だ、セトは」

「む！ あたしのセリフ、真似したな〜！」

ひのりは頬を膨らませた。

「貴様が私の言いたいことを先に言ったんだろぅが！」

ルナも負けじと言い返す。その光景を見て、セトは、友達っていないなあと思い始めた。るいはいつものことだと思い、笑いながらため息をついた。

## 第2話 目覚め編 全ての始まり

今日は待ちに待った宿泊体験学習。セト、ひのり、るい……誰も  
が待ち望んでいた。

たった一人を除いては。

ルナは布団の中にいつまでももぐりこんでいた。そして、こうつぶやいた。

「うわ、行きたくねえ。でも、ひのりとかは困るよな。私が班長だから……」

ルナはどうしても行きたくない理由があった。元にいた学校の人  
がくるからだ。ルナの前の学校の人は、ルナをいじめていた。理由  
は、「人生、楽しみたい」からだそうだ。そんな話になり、偶然と  
おりかかったルナをいじめることになった。

毎日、殴られたり蹴られたりの繰り返し。時々、トイレの水をか  
けられたり。

そんな人生が嫌になったルナは1年前に葉巻学園に引っ越してき  
た。葉巻学園の人たちの間ではいじめなどはなかった。もちろん、  
ルナに優しく接してくれた。葉巻学園は寮式なので、ルナの部屋で  
も一緒に寝てくれた。夕食も一緒に食べてくれた。

そこで出会ったのはひのりだった。ひのりはルナに初めて話し掛  
けてきた少女だった。何にも疑わず、まっすぐな紅い瞳で、ただま  
っすぐ見つめていた。そのあと、話がだんだん弾むようになってき  
て、今ではいいコンビだ。

たまにけんかもしたりしたが、そのけんかは早く収まった。るいのおかげだった。

「わたしは……みんなに迷惑をかけてばかりで、何にも役に立たないで……」

ピン　ポーン！

「ルナー、学校行こうよー！」

玄関のドアががちゃりと開いたすぐ後、ひのりの声がした。ルナは布団をかぶって玄関へ向かった。

「なんで貴様がここにいる！」

「なんでって、迎えにきたんだよ！　行くよ」

「ああ、先にいつてくれ！」

ルナの格好を見たひのりは、小さく笑った。

「ふふっ。待つてるよ」

「私は……行かない」

ルナはうつむいた。

「何で？」

「前の学校の人が……」

「前の学校？」

「私をいじめてきた学校の奴らが来るんだよ……！」

「そんなのはあ、あたしたちが何とかするよ！　行こう、ね！」

「ひのり……先に行っている！　私は、まだしたくをしていない」

「……うん、わかった」

ルナは宿泊の準備をしていなかったのだ。

ひのりにまで迷惑をかけられないと思ったルナは、ひのりを先にいかせた。いくら学園の別寮に泊まるところがあっても、時間的にギリギリだった。



果たして、ルナは間に合うのか！？

### 第3話 特殊能力

7時20分。出発の時間になってもルナは来なかった。

「ルナちゃん、来ないわね……」  
るいがぼつりと呟いた。

「うん、さつき立ち寄っただけど、したくをしてないみたいで……  
あたし、ルナを見てくる！ 先生に言つといて、るい！」  
ひのりは寮のほうに走り出そうとした。しかし、るいに止められた。

「まちなさい、もうすぐ行くのよ！」

「嫌だよ！ るいは、ルナがいなくなったっていいの!？」

その言葉に、どうにも言い返せなかったるいは、ひのりを寮のほうに行かせた。

「……わかったわ。早く来なさいね！」

ひのりは頷きながら、いそいで寮のほうに戻った。

「ああ、おわんねえよ、したく」

ルナは、まだしたくが終わっていなかった。半分ぐらいまでかばんに詰め込んだがそれ以上はもう覚えていない。何しろ行かないつもりだったから、持ち物の一覧表を捨ててしまった。だから、覚えている程度のものしか詰めていない。

「う……くそっ……行きたくねえ」

「ルナ！」

声とともに玄関のドアが開いた。ひのりが中に入ってきた。ルナ

はその姿に驚いていた。

「な、ひのり！？ 先にいつてろって言っただろ！」

「あたしのことなんかいいの！ ルナが心配で来たんだよ？ ね、あたしも手伝うから！」

ひのりはそういつて、笑顔でルナの隣にちよこんと座った。そして、自分のかばんから持ち物の紙を取り出して、ルナの持ち物を乱暴に確認している。しかし、ルナの持ち物をみて声をあげた。

「うーん？ あのさ、なんで写真持つてんの？」

「はっ、えっ！ なんてって……」

ルナは顔を真っ赤にしてうつむいた。その写真はクラスの男、「泉 大河」だった。ひのりがうきうきしたような顔つきでルナに聞いた。

「す・き・な・ん・で・しょー！」

「ちちちちちがう！ 決してそんな感情ではない！」

ルナの表情を見ると、ひのりは少しだけからかつて見たくなった。

「じゃあ聞くけど、なんで写真があるのかなあ？」

「う……、お、遅れるぞ！ もう8時だ！」

ルナは今度は体中真っ赤にして否定した。

「およ、もうそんな時間かい！ さあ、急ごう！」

「……ありがとな、ひのり」

「もう、お礼なんていいのに！ ……できたよ！ 行こう」

ひのりはルナのかばんをルナの首にかけ、立ち上がった。

「もういつちゃったでしょ、みんなもバスも」

「すまない」

するとひのりは待ってました、といわんばかりにっこり笑った。  
「走れば追いつくでしょ！」

「・・・無理を言うな」

ルナは嫌な顔をして言った。ひのりは相変わらずニコニコしている。40キロも走り続けることは、人間には無理がある。

「あたしの背中につかっていいから！」

「・・・お前には、無理だ」

「まあ、いいから」

ルナはおとなしくひのりの背中に乗った。ルナはクラスで軽いほうだ。同じぐらいの背の高さの人でも近くの場合なら簡単に運べるのだが……。今は違う。40キロぐらいもの距離を走って行くのだから。

「じゃ、いつきまーす！ ルナ軽いし、何分ぐらいかな？」

「・・・安全第一だぞ！」

ひのりは振り向いて、にこつと何も言わずに笑った。そして、ルナの寮のドアを乱暴に開け、一直線に走った。その速さは新幹線をぬきそうな勢いだった。

「おまえ……超人だな。走りの」

「ふおっふおっ、走りなら誰にも負けないのだよ、ルナ君」

「すまないな、余計な手間をかけて……」

「いいの！ あたしはあんたに感謝してるんだ。だって、最近なまっただが活躍できるんだし」

ひのりはスピードを速めているわりには平気な顔で話していた。

しばらく走りながら話していると、前のほうにバスが見えてきた。

## 第4話 精神

走っているひのりたちの目の前に、バスが見えてきた。その前には、セトたちが宿泊する予定の『青少年の家』が見えた。バスの中の子供たちは前を気にしながらも後ろも気にした。一人がひのりとルナを見つけたからだ。

「ひのり、すごい！」

「はしってるよ！ バスより早くない？」

バスの中の人たちはひのりを見て感心する。

ひのりはいかかわらず楽に走っている。そのとき、ルナが何かを思い出したかのようにひのりの肩をつかんだ。ひのりは笑いながら振り向いた。

「どしたの、ルナ」

「今まで、どうもありがとうな」

「うん、もうちょいだよ」

「いや、今度は私の番だ」

ルナはひのりからひょいっと跳び降りた。そして、自分の体重と同じぐらいのひのりを片手で軽々と持ち上げた。そのあと、両手で（お姫様抱っこの形になったが）支えた。

「ちょ、ルナ？」

「少し痛いかもしれないが、お前なら耐えられる。バスの上に飛ばすぞ」

「あ、ちょ、まって！……！」

ひのりが叫んだときにはもう遅かった。ひのりはすでに飛ばされていたのだ。からだがり裂かれるような痛みに加え、いつ落ちるかわからない恐怖も加わっているのだから、怖さは倍増したはずだ。

ひのりは見事にバスの上に着地した。あまり痛くも無く、ふわりと着地できた。ルナの投げ方が良かったのか、ひのりの着地が良かったのかはわからないが。

「ルナ！　ありがとう！」

「ああ、それは……こちらの、セリ……フだ」

そっぴい残して、ルナはゆっくり倒れこんだ。

「え。ル、ルナー！？」

ひのりは叫んだが、その声が届くことは無かった。ひのりも向かいくるかぜに耐えられなくなったのか、やがて座り込んだ。すると、セトが窓から手を伸ばした。

「ひのりちゃん、こつち！」

「あ、ありがと、セト」

ひのりはかなり息が切れていて、立ってられないほどになっていた。

「すごいですねえ、ひのりちゃん」

「ほんと、いつの間にあんなふうになったのかしら？」

るいが間をおき、セトに続いて言った。

「もっと、昔はすごかったでしょう？」

「あ、あ、時速、100、キロ……ごほっ、」  
そのことを聞き、セトは驚いた。

（じ、時速100キロですか……？ は、はやいいい！）

「ひのりちゃんは、超人並みの人よね」

るいの言葉に、ひのりはため息をつく。

「あ、あ、こんな、能力、はあっ、いらない、や。あ、たって、化け物だー、とか言われる、ただだし、ごほっ」

「わ、私はそんなこと無いと思うです……」

セトがポツリと、遠慮した様子でつぶやいた。

「せ、セトおおおお！ ありがとう、大好き！」

ひのりは、うれしくてセトに抱きついた。その様子をクラスのみんなが見ていて、セトは顔を真っ赤にして我慢していた。

「ところで、ルナちゃんは後ろよね」

「うん……大丈夫かな？」

「あ、ルナちゃん、立ち上がったる！」

後ろを見ると、ルナはゆっくり腕を抑えながら立ち上がった。そして、ゆっくり歩き出した。セトたちは、いや、クラス全員はルナの精神力に感心していた。



## 第5話 自らの分身『守護霊』

ルナの周りは、見渡す限り田んぼだった。ルナは体は軽いのだが、走りだけはなぜか苦手だった。なので、バスにはとうてい追い付かない。

「やはり、一人で行くのは無理があるか・・・」

ルナの手からは血が流れ、倒れた際に足もすった。右手の自由が利かず、足も不自由なのだから、自由なところは限られている。息も荒くなり、今にも倒れそうだった。

「もう、だめか」

『オレ様がお前を自由にしてやろうか？』

ルナの後ろで声がした。ルナは驚いて振り返った。

「誰だ」

『オレ様はキサマの守護霊だ！』

守護霊と名乗る謎の生物は、ルナを見つめた。そしてまた、ルナも守護霊を見つめた。

「ふうん、守護霊か」

『キサマのな』

ふと何かを思いついたようにルナは、ポンッと手を叩いた。

「お前の名前を考えてやろうか？」

『何を突然。ふん、まあ別にいいか』

「じゃあ・・・うん、ノアがいい」

ルナは嬉しそうな表情で守護霊をノアと決めた。ノアはまあいいか、というような顔をした。

『ルナ、だったか。オレ様に捕まってみな』

「ん」

ルナがノアにつかまると、突然体がふわりと浮いた。ルナは突然の出来事に驚いた。その隣でノアが笑っている。

『相談があるんだ』

「私で良ければ相談にのるが」

『ああ。あと三人、お前といつも一緒にいる奴がいるだろう？』

ノアの言葉にルナはこくりとうなづいた。すると、ノアの周りにピンク、赤、緑の羽が現れ、姿を変えた。一人目はピンク。髪の色は黒で、腰ぐらいの髪が外側にはねている。ピンクの瞳がセトに似ている。黒くて長いコートに、不思議なかたちの杖を持っていた。

二人目は赤。ひのりにそっくりなポニーテール。だが、髪の毛の色は赤だった。瞳の色も紅く、純粋な目であった。普通の服に、ミニスカートだった。

最後に生まれたのが緑色。緑色の髪を横縛りにしている。こちらも、るいと同じ瞳の色で、新緑の瞳だった。緑色のドレスを着ていた。

『こいつらに似ている人間がいるだろう？ そいつに、こいつらを渡してくれ』

「私はかまわないが」

『すまない。さて、行くか』

ルナと守護霊たちは、青少年の家に向かった。

しばらくいくと、ルナはノアに話し掛けた。

「ところで、ノア。お前は男なのか？」

『さあな』

「ふん」

ルナは正直、驚いていた。なぜ、自分の性別をはっきりといわないのか、と。

『まあ、キサマがなんと思おうが、オレ様には関係ないがな』

「これから、いろんなことがあるかもしれないが、その時はよろしくな」

『ああ』

「つきましたね」

「なんだかんだ言っで、ついたね！」

「さあみんな、荷物を降ろしましょう」

セトは眠そうに立ち上がり、荷物を降ろし始めた。ひのりもるいも荷物を降ろし始めた。そんな中、ひのりはつぶやいた。

「アオイ、くれば良かったのにね」

「そうね。あんなにたのしみにしていたし」

「アオイ・・・？」

「あ、セトは知らないよね。アオイって子」

「友達になれますかね？」

「多分なれるよ！ 優しい子だから、あの子は」

「一度、見てみたいですね」

「今日は遅れてくるかも知れないって」

ひのりは遠くを見つめる顔をした。そして、こうつぶやいた。

「来る勇気が・・・あるかな？」

ひのりのつぶやきは、セトたちには聞こえていなかった。ひのりがこうつぶやいたのには訳があった。アオイもやはり前の学校でいじめられていた。ルナと同じ学校で。

「さ、いこっか！」

「はい！」

「おーい、はぐれるなよー」

先生の声が聞こえると、みんなは一列になって並んで歩いた。セトは、初めて見る景色に見とれ、左右を繰り返してみている。そのうち、となりの花園小学校がばらばらに行動するのが見えてきた。

「あゝら、弱虫ルナちゃんが転校していった葉巻学園だわ」

「貧乏くさい。キャハハハ！」

と、わざと葉巻学園に聞こえるように言った。ひのりといがその言葉を聞き、ムカツとした。ただ、セトだけは、なぜか花園小学校に見向きもせず、周囲の景色に目をやっている。

「ちょ、セト、むかつかないの？」

「な〜に〜が？」

セトは悪口を言われていることに気づいてはいない様子だった。

「向こうの小学校！ 悪口言ってるんだよ？」

セトはその言葉を聞いても、ただただ周囲を見つめている。そして、微笑んだ。

「楽しく過ごそう？ せっかくここにきたんだから」

その言葉で、ひのりもいも次第に顔が緩んだ。

（せ、セトには人を笑顔にする効力があるのかな？ 不思議・・・）

ひのりはふと思った。

ばたんっ！

セトたちの後ろでドアが閉まる音がした。真っ黒な車が見えた。

その車からは、綺麗な金色の髪、温かそうなフード、そして銀色に光る斧だった。

「おくれたのさ！ ごめんなのさ！ あっ、はじめましてなのね、こんにちは」

「こここんにちは・・・」

セトは、太陽に照らされ不気味に光る斧に怯えていた。

「あ、この斧はよほどのことがない限り使わないのさよ？ あたしは刹那 アオイ！ よろしくなのさ〜！」

「少しびつくりしました。私は如月 セトです。よろしくです」  
「よろしくなのさ。これからはあたしたち、友達なのさ！ ところで、ルナは？」

「後ろだわ」

「あつ、ルナ！」

ひのりとりが後ろを見ると、ルナが歩いているのが見えてきた。バスから見た様子ではなく、もうすっかり回復をしていた。

「あいづらでいいんだろう、ノア？」

『ああ。頼む』

ルナは、セトたちのところに走った。セトはのんきに手を振っている。ひのりはルナの元に走り出した。久しぶりに再会するみたい。るいとアオイも手を振った。

「ルナー！ 着くの早いね」

「ああ、こいつらのおかげだ」

「だ・・・れ？」

「この赤い奴をひのり、ピンクをセト、緑をるいに、だそうだ」

「へえ、名前は？」

「私のは自分で決めたが、お前らはまだだ」

「名前、決めようね！ とりあえず中に入ろう」

ひのりの一言でみんなは中に入ってしまった。ただ、セトはこんなことしか考えていなかった。

（お昼はな～にかな？）

## 第6話 目覚めし人格

真っ赤に照りつける太陽がセトたちのてっぺんに上る頃、セト達は食堂に向かっていた。中でも一番つかれているのはセト。いつもよりもニコニコした顔で歩いていた。

「おっひつるっは、なあにかな？」

「セトちゃん、そんなに楽しみなの？ バイキング方式らしいわ」

「あうー！ ということは・・・食べ放題ですっ！」

セトは眼をきらきらさせてるいに迫っっていた。るいは一瞬驚いた顔をしたが、やがてにこつと笑い、セトの頭を優しく撫でた。セトも穏やかな顔をして笑った。

「あらあら、またバカ学校がいるわ、ご飯がまずくなっちゃうわね」

「あはは、言えてる」

花園小学校がまた悪口を言っていた。しかも大声で。セトがそのことを聞いて、花園小のほうに走り出した。

「誰がバカなのですか？」

セトは葉巻学園の悪口を言っていた人の目の前に立って、言った。花園小学校の女1人は小波 楓という名だった。もう一人は要力ナという名だった。

「臆病ルナとロボットアオイがいる学校がバカってこと。少しは考えな！」

楓は挑発するように言った。セトは驚いた。アオイがロボットだと言ったことを楓の口からきいてしまったからだった。

「アオイちゃんが、ロボット？ ということでしょうか？」

「そうよ、わたし、何でも知ってるのよ！」

「そんな訳・・・ないでしょう？」

みんながアオイのことを見つめた。みんなの冷たい眼にアオイは恐怖を覚えた。そして、強く斧を握りしめた。アオイがつばやいた。「何、勘違いをしている・・・？ロボットじゃない。電腦人間だあああ！」

アオイの瞳のいろが変わった。瞳の色は金から赤に。そして斧をぎゅっと握った。

「電腦人間は、データを消去されれば消える。そのデータを消去しない限りボクを殺せないよ・・・？」

「あ、アオイ・・・ちゃん？」

セトが驚いた顔でアオイに話し掛けた。

「ごめんね、セト。ボクはアオイじゃなくて・・・全くの別人、アクア。アオイの守護霊・・・みたいなものかなあ・・・」

アクアと名乗る人格はどうやらアオイの守護霊らしかった。アクアは鉈を片手で振り上げた。そしてこう言った。

「さて、ここで殺人事件をおこすのも嫌だね・・・アオイも後に困るだろうし。また逢おうね」

そう言っアクアはアオイと人格交代をした。

「うーん、あれ、あたし何をしてたんだっけ？」

アオイは何も覚えていない様子だった。どうやらアクアが表に出ているときは、アオイ自身の意識がどこかに行ってしまうようだった。

「アオイ、ちゃん」

「ん、セト、どうしたの？」

「明日は土曜日ですよね？」

「うん、それがどうしたのさ？」

「今日着いて、2泊3日。土曜日の7時半にやる遊王、見れないんですよ！」

「あゝ、残念なのさ・・・」

セトはこうすることで話の話題を変えることが出来ると思いついた。しかもセトはそのアニメが大好きなので、話す話題に困らなかった。

「あ、それと、ご飯の時間ですよ。いっぱい食べましょうね!」

そういつてセトは席に着き、「さゝ、食べるぞー!」と言っていた。

その様子を見て、ひのりたちも席に着いた。

食事が終わり、自分たちが借りる部屋に鼻歌交じりで歩いていたセトたち。

しばらく行くと、何もない場所で突然、セトが大きな音を立てて転んだ。そんなことも気にとめずにセトはすぐに起き上がり、再び鼻歌を歌い始めた。

「セト、痛くないの??」

「なにがですか?」



「ああ、セトちゃんは気づいていないのね・・・」

「私に何か、あったんですか？」

「私は、セトがここまでマイペースだとは思っていなかったな」

「??」

セトは、みんなの言っていることが分かっていたいなかった。

というよりは、転んだことに全く何も気づいていないようだった。

「ところでさ、この守護霊たちには名前はつけないの？」

「うーん、そろそろつけましようね」

「別々に分かれて付けてみるというのはどうかしら？」

「うん、しばらく自由行動だから、その間につけましよう！ 名前を付け終わったら、ここに集合です」

そう言って5人は別々の道に行った。

## 第6話 目覚めし人格（後書き）

す、すみません、遊 王知らなかったですか？  
でしたら、ごめんなさい、すみません。

これからよろしくです。

## 第7話 名前

「はじめまして。セトっていいます」

『こちらこそ初めまして』

「名前、何がいいかな？ 覚えやすいのがいいですね」

『そうですね』

「君もおっとり系だね。リーフってどうですか？ リーちゃんってよびますね」

『ありがとです』

セトは冬の冷たい風が吹く外に来ていた。セトの長く、白い髪が揺らいでいた。普通の人間ではきつと、耐えられないほどの寒さの中にセトは、何事もないような顔で立っている。

名前が決まると、二人は建物の中へと消えていった。

「初めまして！ ひのりだよーん！」

『こちらこそ初めまして！』

「君とはじめてあったときから決めておいたんだ、名前。太陽みたいに元気な子だから、サン。どうかな？」

『わーい、わーい、嬉しい。ありがとーひのりちゃん！』

ひのりたちは1階と2階を結ぶ階段で、名前を決めていた。どうやらひのりは、元から名前を決めていたらしかった。なので、早く決まった。

名前が決まると、集合場所に帰っていった。

「あんだ、非科学的ねー」

『・・・初対面で失礼ですわよ』

「まーまー、そう言わないで。あんだの名前は、パンチヨ！ いい名でしょう？」

『・・・あんだ、ネーミングセンスないですわ』

「名前付けてあげただけいいとしなさい。じゃ、これからよろしくー」

『先が思いやられるですわね』

るいたちは屋上に来ていた。適当な名前が決まると、集合場所へと向かっていった。

「あーあ、あたし、やることないのさ」

『アオイ・・・』

突然アオイの後ろから聞こえてきた声。しかし、振り向いてみても誰もいなかった。それもそのはずだ。アオイは2階の手すりにもたれかかっていたからだ。

「おつかしーのさ・・・」

『アオイ・・・』

今度はアオイの隣でさっきと同じ声が聞こえた。振り向くと、アクアがいた。

「だ、誰なのさ!？」

『うーん、君の守護霊・・・かな?』

「そっ、そもそも、守護霊って何なのさ!？　そして、何であたしの名前を知ってるのさ!」

『ま、一応ずっとアオイの中にいるから。みんなの会話を聞いてれ

ば分かる』

アクアは見透かしたように言った。

『君が望むのなら消えるよ。いつでも、消えろというのなら』

「・・・別にいてもいいのさ」

『でも、いつまでもいられる訳じゃないし、寿命の問題もあるから。それまで、仲良くね』

アクアが言うと、アオイも笑って答えた。

「うんっ、よろしくなのさ」

ルナは、アオイから少しはなれた場所に立っていた。静かに、誰にも聞こえないような声で、しかも無表情で歌を歌っていた。その様子を、ノアが眺めている。

『・・・歌、好きなのか？』

「下手だが、好きは好きだ。歌によっては耳に残るものもあるが、そんな歌はめったに聴かない」

『ふうん・・・』

ノアは黙ってうなづいた。ルナは今度は、薄い笑みを浮かべながら歌を歌い始めた。

「あゝ、ルナちゃん」

「セト・・・他のみんなはまだか」

「すれ違わなかったですよ、まだ時間もありますし」

セトはいつもの笑顔で言った。その肩の上には、リーフが座っていた。

「あ、この子の名前はリーフですよ、よろしくやってください」

「あ、ああ。私の守護霊はノアだ」

「いい名前だねっうんうん」

セトは首を縦に振った。

「おい、セト、ルナー！」

「あ、ひのりちゃん」

「あれ、るいはまだなんだ？」

「ああ、まだだ」

「そろそろ来るよね！ あ、この子はサン」

『よろしく ！！』

サンは大きな声で言った。笑顔がまぶしかった。

「あー、みんな早いわねー」

「早すぎるのさ・・・」

「あれ？ アオイは名前を決めなくたっていいんじゃない？」

「少しアクアと話し込んでやって」

と、後ろを向いて照れくさそうに言った。

『アオイが話を終わらせてくれなかったんだろう！』

「あ、あははは」

アオイとアクアは、見た感じは息がぴったりのようだった。

## ピンポーン      パンポーン

『葉巻学園の生徒たち      各自の部屋へ移動してください』

放送が入った。今セトたちがいるのは2階。集まる部屋は3階だ。

「急ごう、みなさん」

「うん」

セトたちは急いで階段を駆け上っていった。

「はあ、はあ、守護霊たちは飛んでいいな・・・」

『人間のような愚かな生き物に生まれたことを後悔するんだなあ・・・』

「ノア、そんな風に言っなよ」

『ああ、悪い悪い』

セトたちはやっと3階に着いた。

## 第7話 名前（後書き）

なんだかんだ言って、会話が多くなってしまい、  
申し訳ございません。

次からは気をつけたいと思います。  
次もよろしくです。



## 第8話 カヌー体験

セトたちは部屋へと全速力で走った。周りの人たちに注意されたりもしたが、そんなことは気にしなかった。しかし、走った甲斐もなく、まだ誰も来ていなかった。

「あつれー、まだ早かったかな？」

「別に、全速力で来なくても良かったんじゃないのか？」

「きつ、気にしない気にしない！ そろそろ来るよ、みんな」

そう言っつてセトたちは、3分ぐらいつつと待っていたが、誰も来なかったもので、飽きてきた。

「・・・つまらないのです」

「こうして待つてもだあれもこないとは・・・」

また3分ほど待っていた。すると今度は、5〜6人ぐらいの人影が見えた。全員女の子のようだ。

一人の女が近づいてきた。

「あーら、ひのりさんたち早いんですね。おーっほっほっほ」

「・・・あのさ、萌。そのしゃべり方、止めたら？」

少女は萌と言う名だった。こんなしゃべり方をしていると、相当の大金持ちのように聞こえる。しかし、口癖の割にはそんなに金持ちではない。

「わたくしは将来、金持ちになって見せるんですよー！ おーっ

ほっほっほ！ 絶対ですわよ、ひのりさん」

「人それぞれ夢も違うですもんね〜頑張ってくださいな〜っ」

「あらあら、セトさん、応援してくれて嬉しいですわ〜！」

萌は小躍りをしながら笑っている。セトが苦笑いをのをする裏腹に、ひのりたちはそれをただ、笑って見つめていた。

そんなことをしている間に全員がそろった。

「これからカヌー体験をする場所に行くぞー。部屋に戻って、水着に着替えて来い」

「「「「「はい！」「」「」「」

元気よく返事をした生徒たちは、各自の部屋に戻って着替えをした。

「あー、カヌーも花園小と一緒にー」

「あんな奴ら、無視すればいいだろうが、ひのり」

「そうなのさ！ 無視なのさ！」

「それが一番ですよ」

「そうね・・・気にとめないほうがいいわよ」

セトたちはもうとづくに着替え終わっていた。実は、高速で着替えていたのだった。だからゆっくりと会話が出るのだ。

守護霊たちは話し合った結果、おいていくことになった。

「あ、アオイ・・・」

「ん？ どしたのさ、ルナ」

「斧は置いていったほうがいいとおもぅが・・・」

「いーの、いーの！ 何かと便利だから」

するとアオイは後ろを向き、自分の首に鉋を突きつけた。

「たとえば・・・殺した人をバラバラにするとか・・・？」

そう、アオイは一瞬だけアクアに変化していた。

「って・・・アクア！ 勝手に表に出てきちゃだめ！」

また人格がアオイに変わり、アクアは怒られた。しかしその表情もしだいに明るくなった。

「うそうそ。斧は置いていくのさっ」

「持っていつて先生に取られても、しょうがないもんね・・・」

「では、カナ／＼体験行きましょう！」

セトは相変わらず、のんびりした口調で話した。その表情は、いつもより格段に明るかった。

セトたちはカナ／＼体験の場所に来ていた。葉巻学園の前に並んでいるのは、例の花園小だった。花園小はまたセトたちの悪口を言っているようだった。

「えーっ、またあの人たちと一緒に!？」

「最悪・・・」

このことを聞いたアオイは、色々と、ぶつぶつ喋っていた。

「何の怨みがあるのさね？ そのうるさい口を黙らせてやろうつかあ

？ ふふふ・・・」

「ま／＼、アオイちゃん落ち着こう、ね」

セトがアオイを静めた。

「・・・セト、ちよつといいか？」

ルナは、セトにしか聞こえない声で言った。そして、ひのりたちからかなり離れた遠くの場所に行った。そして言った。

「花園小の楓とカナ・・・私はあいつらに守護霊が憑いていると思う」

セトは急に真剣な表情になった。

「ええ、私にも見えますよ、ルナさん。ずっとあの人たちに憑いて

いる、の守護霊が　　」  
その様子からすると、セトにも楓とカナの守護霊が見えていたようだった。

しばらくの沈黙後、ルナが口を開いた。

「あいつらにある心の闇を砕けば、あいつらも元通りになるはずだ。ずっと仲の悪いまま、宿泊体験をするのは誰だって嫌だろう・・・？」

「そうですね・・・」

セトが言つとルナは静かに立ち上がり、ひのりたちの元へと帰っていった。

「続きはあとで話す。とにかく今は・・・」

「カナ～を楽しむのですよ～」

セトたちはみんなの元へと戻った。

今、セトは感知していたのかもしれない。

カナ―体験のずっと後に起こる長い戦いを

「か、カナ―って意外と難しいね、セト・・・ってあんたも漕げーっ！」

ペアは、セトとひのり、アオイとるい、萌とルナ・・・という組み合わせだった。

セトは目をつぶっていて、全く漕いでいなかった。ひのりは運転が下手なので、途中で色々なところにぶつかった。その姿をセトは、のんびり眺めていた。

「さあて・・・ひのりちゃん、一緒に漕ぎましようね～」

セトはゆっくりと漕ぎ始めた。ゆっくりだが、確実に、正確に進んでいく。

『ひのりちゃんっ、ふぁいと、おー！』

「さっ、サン・・・何でここにいるの・・・」

『そのちょーしですよ、セトちゃん』

「りーちゃん・・・部屋にいるんじゃないのですか？」

『抜け出してきました』

「あら・・・そーなんですかあ」

セトは微笑み、よそ見をした。その時だった。

がたんっ！

セトたちの力ヌーが花園小の力ヌーにぶつかった。その力ヌーは、偶然にも、楓とカナが乗っている力ヌーだった。

「ちよっ・・・危ない運転しないで下さる？ セトさん！！！！」

楓が強い口調で言った。セトは苦笑いをして答えた。

「どーして私の名前を知っているかは分かりませんが・・・」

そこまで言っつて、区切った。セトは真剣な顔になり、言った。

「その名前で馴れ馴れしく私を呼ぶんじゃないねえ・・・！」

その言葉に楓とカナは驚いた。ついでにひのりも驚いた。こんなに不気味なセトを見たことがなかったのだから、驚かないほうがおかしい。

「おおっどー・・・この性格は直さないどーです」

そのあと、セトはすぐに元に戻り、明るくなっただが、しばらくひのりと楓とカナはセトに怯え、見つめあっていた。

## 第8話 カヌー体験（後書き）

展開が早く、申し訳ございません。  
更新は2、3日に一回ぐらいです。

きつとここからが重要になっていきます。  
これからよろしくお願いいたします。

## 第9話 もう一つの影

「そろそろ部屋に戻るぞー」

先生の声が聞こえると、みんなはカヌーを片付け、部屋に戻った。そんな中ひのりは、一番後ろに行き、頭を抱えていた。

（ああ、あのセトは見間違えたんだ・・・！ あたしは疲れてるんだ、あははは・・・）

そんなひのりの様子を、セトは不思議そうな顔をして見つめていた。他の学校も、ひのりの様子を、なにか面白い生き物を見るような目で見つめていた。

「今日はどうしちゃったんです？ ひのりちゃん」

「（あ、いつものセトだ・・・）ううん、なんでもないよー！」

『ひのりちゃん、疲れたんじゃないのかな？』

みんなが不思議そうにひのりに声をかける。ひのりはわざと冷静なふりをしていた。

「頭がショートしたんじゃないのか？」

「なっ、ルナーー！！」

ルナが言うと、ひのりはルナを追い掛け回した。先生もあきれた顔でみている。花園小の楓とカナはいつものように悪口を言っているようだ。

「セト・・・あの話なんだが」

「はい・・・」

「あいつらの心の闇は、きつとお前にしか砕けない」

ルナはそつと言った。まるでそのことを確信しているかのようだった。

しばらく間をおいて、セトが発言した。

「な・・・んですか？」

「・・・詳しくはリーフに聞くがいい」

「あ、はい・・・」

話が終わると、みんなが先に行っているのに気がついた。二人は走った。

しばらく行つて、みんなに追いついた。

「はあ・・・もえ・・・さん、萌、さん」

「あら、セトさんどうかありませんでしたんのですの？」

「お願いがあります。その、さん付けは・・・止めてもらえませんかでしょうか？」

「わたくしは構いませんわ。セトちゃんでもいいのでしたら、そう呼ばせていただきますわ」

萌は不思議そうにおもった。

なぜ、セトさんと呼ばれてはいけないのか、と。

セトは『セトちゃん』といわれると、とても嬉しそうな顔をした。

口調もさつきまでは怖かったが、元のようにゆっくりになった。

「ありがとう、萌さん」

セトは微笑んだ。

「い、いえ、ただ、ちゃん付けにただけですわよ？」

「いゝんですよ、それだけでも」

「お、おーっほっほ！ 当然のことですわ！」

萌は苦笑いをした。



「今日の夜ご飯は、自由だぞー。班の人が全員そろったら、食べなさい」

「くくくくへーい」「くくく」

葉巻学園の人々は、班ごとに並んでいすに座った。他の班が食べ始めているのに対し、セトたちの班は、未だに食べ初めていない。まだセトが来ていないからだ。

「セト・・・何処に行ったんだろ？」

「少し待っていきましょうか」

その頃、セトは

「あ、楓さん・・・？」

「なっ、何であんたがこんな所につ？」

セトは楓たちのほうに行っていた。楓が下を向いているときに、ひょこつと顔を出したので、楓はかなり驚いていた。

「あ、驚いちゃってますか？ 食事中失礼致しますです」

セトは手を腰に置いて、笑って見せた。そして顔が豹変し、こう言った。

「小波 楓、要 カナ。もし良ければ、深夜0時に外に来てもらえるところれしゝなあゝ。あはははは」

眼の色は変わり、狂ったように高笑いをしているセトの前に、困ったように見つめあい、うなづきながら苦笑いをする楓とカナがい

た。

「あ、ではそろそろ戻りますね」

セトは目の色を戻し、みんなの待つほうへと戻っていった。その後ろ姿は、なぜか小刻みに震えていた。

「あーっ、セト、遅いぞぉ！」

ひのりが叫んだ。

「あ、ごめんなさい」。遅くなつてしまいました」

「どこに行つてたのさ？」

「ん・・・ちょ、ちよつとトイレに行つてきました」

セトは一瞬、困つたような顔をした。が、うまくいい訳をした。

「そーか・・・じゃあ仕方ないのさね！ さ、食べるのさっ」

そう言つてアオイは立ち上がり、『バイキングコーナー』へと向かつた。それに続きセトたちは、続々と立ち上がった。

バイキングコーナーには、いろいろな物が並んでいた。野菜、肉、魚、デザート・・・学校の給食ではめつたに出ないものが目の前にあるのだから、セトたちは目移りしていた。

「な〜に〜食べよ〜かな？」

「たーっくさんあるね！」

「夢は大きく、全種類食べますよ〜！ あははは」

セトの目がキラキラと輝きだした。次々と皿に盛り付けていく。

いったん席に戻り、色々なものを一度に口に含み、飲み込む。この動作を繰り返していた。

食べ始めてから、30分が過ぎた。

「あと・・・このとうもろこしだけです〜！」

あつという間に、とうもろこし以外の食べ物も平らげた。

「とう・・・もろこしっ」

そう言っとうもろこしを手を取った。そのときだった。

「おい、そろそろ部屋に戻るぞー」

先生の声が聞こえた。セトはその体勢のまま、じっと立っている。

しばらく間を空けて、先生が言った。

「如月・・・お前、そんなに大食いだったか？」

「あうっ・・・あとうもろこしだけだったですのに・・・」

そう言って半べそをかいているセトは、もう既にとうもろこしをほおばっている。

そんなセトを置いて、他のみんなは『ごめんね、セトちゃん』と思いつつも、行ってしまった。

「あう・・・待ってくださいよ」

セトもとうもろこしを口に含み、半べそをかいたまま、みんなを走って追いかけていった。その様子を、他の学校が高らかに笑っていた。

「あははは！ 無様な姿だねー！」

楓は言った。その言葉を、その場に残った一つの影が聞いているとも知らずに。

## 第9話 もう一つの影（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

『いつもより、読みにくくなってしまった』  
と、反省しています。

これからはちょっと書くのが遅くなります。  
これからもよろしくです。

## 第10話 全ての真実

セトはみんなを走って追いかけていったが、結局みんなに追いつくことはなかった。それどころか、途中で追いかけるのをあきらめ、階段のずつと下を見つめていた。

風が冷たかった。

「ふう・・・」

結局追いつきやしないです」

セトはつまらなそうに呟いた。

しばらくの静寂。

この場所に誰一人訪れることなく、なかった。

「リー・・・ちゃん、いますか」

セトはリーフを呼び寄せた。

「セトちゃん・・・？ どうしたのです？」

「教えてください。あの二人のことを。そして、私に起こっている変化を・・・！」

セトは、片手で壁をおもいきり殴りつけた。

「・・・分かりました。言います、いいのですね？」

「覚悟は出ています、リーフ。全て、教えてください」

リーフは、セトの言葉に困りながらも小さくうなづいた。そして、重々しく口を開いた。

「セト、あなたはもう感知していたのかもしれませんが・・・。

あなたは人間ではありません。ついでに言うと、あなたの1番近くにいるお友達4人全員が、人間ではありませんですよ」

「！」

「この世界はもちろん、人間の住み着くための星、『地球』です。

しかし、あなたは人間ではない。

お分かりですか？ あの楓とカナも『ニンゲン』という生き物ではない、『バケモノ』といういきものです。

あなたは 『女神』という生き物です。

別世界から派遣された、人間とは全く違う生物。あなたは、世界を救う存在……です。

……私が言えることはこのぐらいですよ？」

「そ、そうですか……。おしえてくれてありがとうございます、リーちゃん」

セトは苦笑いをしながらも、体は小刻みに震えていた。自分の真実、仲間の真実、楓たちの真実を知った今、自分には何ができるだろうか？ セトはそう考えていた。

『楓とカナという者がいましたね。その人は『心の闇』に蝕まれているでしょうね……。』

リーフは不気味な顔をして言った。

しばしの沈黙が続き、セトがもう、耐えられない！ という風に口を開いた。

「私に……。何をしろと言うんです。！」

『言ったでしょう……。？ あなたは『女神』、世界を救う生物。あの人たちの心の闇をうち砕くのです！』

その行動がやがて、この狂った世界を救う方法となるのなら

『

セトには、リーフの発している言葉の意味が理解できなかった。ただ1つ分かることは、『楓たちを救う』ということのみだった。

「あ・・・ごめんね。長く説明させてしまいまして・・・。行きましょう、みんなのもとへ」

『はい、セトちゃん!』

セトとリーフは、みんなの元へと歩いて向かった。

「せんせーっ、セトちゃんがいませーん」

ひのりが先生に向かって叫んだ。それと同時に、急にみんなが心配し出した。

「セトちゃんがいませんのですの?」

「場所、知ってるのかな?」

「そのうち戻ってくるだろう。如月の班だけ先生のところにこい。他の人は部屋に入れ」

みんなのいつもの元気な返事、やんちゃな返事が返ってくることはなかった。それほど、セトを心配していると云うことだろう。

「お前らは、如月と一緒にじゃなかったのか?」

「はい、一緒ではないですよ」

先生の問いに、即行で答えたのはひのりではなく、るい、ルナ、アオイでもなく、セト自身だった。セトは、るいの後ろにそつと立っていた。そのセトの行動に、みんなはぎょつとした。

るいは、セトがずっと立っていたのにも関わらず、今までずっと気がついていなかった。視線も感じない、気配も感じなかったらしかった。

「せ、セトっ! 心配したんだよー」

「ごめんなさい」。食べてたら、遅くなっちゃって・・・」

ひのりの言葉に、セトは笑顔で答えた。

「皆さんにはご迷惑をおかけいたしますです」

「これからは迷子になるなよ」

「……はい……」

5人は、自分たちの部屋へと戻っていった。

セトたちの部屋は、萌と藍と言う人と同じ部屋だった。藍は、葉巻学園でとても神秘的な女として有名だった。

「みんなの分、布団引いた……」

「藍ちゃん！　ありがとです！」

セトは思わず藍に抱きついた。

「セト、照れる……」

藍は、微笑んだ。

「で、セトちゃん。今までどこにいたの？」

るいが笑いながらたずねた。セトも笑って言った。

「みんなが見えなくなってしまうて……道も分からなくなってしまうました。冷静に考えたら、三階だと言うことが分かりました。いや、戻れてよかったのですよ」

遠くを見るような目で、まるで独り言のような喋り方だった。棒読みのようにセトは言った。

言い終わると同時に、部屋をノックする音が聞こえた。

「おい、風呂だぞー」

どうやら風呂の時間のようだ。セトたちは大きくうなづいた。だが、アオイだけは下を向いていた。

「斧って、持っていても問題ないのさ？」

「お、お風呂に斧を持っていくの!？」

ひのりは驚いて、たずねた。

「だ、だって、その、アクアを置いていくなんで、かわいそうなのさ」

アオイは途切れ途切れに、照れながら言った。

『アオイ……ありがとう』

アクアも微笑んでいた。



「よおっし、お風呂でっすよ〜！」

「うん、いこっ！」

セトたちが楽しそうに部屋の外に出ると、もう他のみんなは、先にいっただいた。セトたちは、苦笑いしながらお風呂へと向かうことになった。

## 第10話 全ての真実（後書き）

大変申し訳ございませんっ！

遅くなってしまうました。

遅くなってしまうた上にこんな駄文で・・・すみません。

これからも、更新がとてつもなく遅くなりますが、よろしくですっ！

## 第11話 見える、見えない。

風呂への道順は、先生から知らされていたので、すぐに分かった。階段を下り、一階の一番奥の部屋。

そう暗くもないが、明るくもない廊下。

そんな中、アオイが手で持っている銀色の斧が、よりいっそう輝いていた。

「皆様、さつきから気になってしょうがないのですわ」

萌が不思議そうにセトたちに話し掛けた。その後を、藍が続けた。横にいる変なの、何」

4人は自分の肩を見つめた。そこには、4人それぞれの守護霊がいた。

「あれれ、見えていたのですか？」

「な、何で見えるの！」

「ひのり、聞いているのは我。その変な生き物は何」

藍は首を傾けながら、ひのりに聞いた。

普通に『守護霊』と答えると、信じてもらえるかも分からない。

ひのりは、どう答えれば良いか迷っていた。

『あたちたちは、守護霊っていうんだよ！』

サンは、笑いながら藍に言った。意外にも藍と萌は、納得するのが早かった。

「へーえ、これ、おもちゃじゃないんですの？」

『おもちゃじゃないよ！ 守護霊だもん』

萌が言うと、サンはふうっと膨れた。萌は笑った。

「おもしろい『おもちゃ』ですわねーっ、おーっほっほ」

「我には守護霊という非科学的なものは信じられない」

藍は、またも首をかしげながら、守護霊の存在を否定した。目の前に、本物の守護霊がいるにもかかわらずに。藍の言葉を聞いて、セトはリーフの首をつかんだ。リーフは目を丸くして叫んだ。

『なっ、何するんですか、セトちゃん！』

「藍ちゃん！ここに本物がいるので信じてあげてくださいな」セトは、リーフの言葉を見殺し、笑いながら藍に向かって言った。リーフは無視されたので、腕組みをして膨れている。

「守護霊・・・信じてあげてもいい」

藍が言っていると、守護霊一同は笑い、そして泣きながら両手を挙げて喜んだ。

「みんな、急ぎましょう！」

セトたちは風呂に向かった。

「ふえっ、間に合った・・・？」

ひのりは、息を切らして呟いた。ひのりだけではなく、他の5人も息を切らしていた。

「遅いぞお前ら・・・」

先生がセトたちに言い、ため息をついた。ふと見ると、まだみんな風呂には入っていないかった。セトたちを待っていたのだった。

「先に入っちゃうと悪いかな？　って思ってた！」

「だな」

みんなは笑顔でセトたちを迎えた。そんな中、一人つれない顔をした少年がいた。

その少年は加藤　のりお。5年1組で最も乱暴で、みんなから嫌われ、怖がられていた。特に、アオイはのりおをかなり嫌っていた。何故かは不明。

「つたく、遅れてんじゃねえよ、女ども！」

「のりお・・・そんな言い方ないのさ！」

アオイの銀の斧が暗く光る。そこに潜むアクアは、アオイの心の奥でそつとこの様子を見つめていた。何にも言わずに、静かに・・・。

「遅れたのはてめえらのせいだろ！」

「ああ、それはすみませんなのさ！　でもそんな言い方ないのさ」

「オレに口答えしてんじゃねえよっ！」

「この・・・む」

アオイがその先を言おうとした瞬間、セトたち以外に姿の見えないアクアが、アオイの口を塞いだ。アクアは冷たい目でアオイを見つめる。

『アオイ・・・これ以上口げんかをやってると、風呂に入ってる時間が短くなるよ』

アオイはアクアをじっとみつめた。

## しばらくの静寂

その後、口を開いたのは、アクアだった。

『争いはとつてもいけないよ。決してやってはいけない』

「だ、だって・・・」

アオイは何か言いたそうにアクアをみつめている。

『あの人は、ボクが何とかしておくから、ね？　ボクを信じて・・・』

」

アクアはアオイの髪を撫で、微笑んだ。アオイは、しばらくアクアを見つめていたが、やがて小さくうなづいた。

「おい、アオイ。何を独り言いつてるんだよ！」

「え、あ、何でも・・・」

やはり、アクアの姿はセトたち以外には見えていなかった。他の人間から見ると、アオイが独り言を言っているように聞こえているのだ。

「変なやつ・・・つか、とつと入ろうぜ」

のりおは、一人で勝手に行ってしまった。その様子を、アクアが真っ赤な眼で見つめていた。

「眠いです、早くお風呂から出て寝たいです」

そう頭を洗いながら呟いたのは、セト。セトは、長く白い髪を洗うのに1倍の時間がかかるのだった。

『セトちゃん、私の髪も洗ってください』

「あたしが洗ってあげる、リーフちゃん！」

ひのりはシャンプーを手にとり、リーフの髪を丁寧に洗い始めた。

「すみません、助かります」

「いーのいーの！ 長い髪は洗うのも大変だからね」  
ひのりは笑顔でセトを見た。セトも笑顔で返した。

「のあーっ！ 大変なのさ！」

アオイが風呂場を駆け回り始めた。時折り転ぶこともあったが、そんなことは全く気にしていない様子だった。みんながアオイに注目した。

「アクア、アクア？ ねえ、アクア」

何度も斧に向かって語りかけるアオイ。いつもは、斧から明るい返事が返ってくるはずが、今日はまるつきり返事は来ない。アオイは泣き出した。

「うえっ、アクツ、ア……」

『呼んだ？ アオイ』

今度は斧からではなく、アオイのすぐ後ろから声が聞こえてきた。アオイはすぐに認識した。

アクアの声だ、と

第11話 見える、見えない。（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。  
大変遅くなりました。

読者様の信頼を失ってしまったら・・・と、考えたくもありません。  
次も遅くなってしまったら、すみません、なるべく頑張ります！



## 第12話 風呂で、そしてロビーで。

「アクア、いるなら返事をして欲しかったのさ・・・」

「ん、ごめんね・・・」

アクアはアオイの髪を撫でた。アオイは目を赤くしてアクアを見つめた。

「どうして・・・返事をしてくれなかったのさ？」

「・・・なんでもない」

しばらく間を空け、アクアは答えた。

アクアがはやく答えなかったのは、理由があった。

実はアクアは、のりおの後を憑いていった。

「タノシイカ・・・？ クラスヲ、シキルコトガ」

アクアは、のりおのすぐ後ろで呟いた。当然、のりおには姿は見えない。

「誰だ、オレの背後に立つな！」

「ボクノコエハ、イマハキミダケニシカ、キコエナイ・・・ムダダヨ」

怯えるのりおの頭を、そっとアクアは撫でた。いつもアクアはそうだった。怯える人を見たり、悲しむ人を見たりすると、頭を撫でて安心させていた。

「ま、怯えないで。今回はキミと話がしてみたただけ・・・またね。」

あ、そうそう。

あんまり調子に乗っていると、ボクに代わってアオイがキミを処分するよ・・・いいね』

アクアは赤い眼で見つめながらそれだけ言って、白い霧に消えていった。のりおはその姿をにらみ付けていた。

とのことだった。

「人それぞれ、色々な理由がありますし・・・返事をしない理由も色々あるのです」

「ん・・・そだね。今度から返事をするのさよ？ アクアアー」

『はいはい』

「ねえ、のりおさん。誰とお話を？」

ここは男子湯。大河がいきなりのりおに寄り、話し掛けた。一瞬からだを震わせ、怯えたのりおだったが、すぐにいつもの態度をとった。

「てめえには・・・関係ねえんだよ」

「関係あるよ？ 困ったことがあったら、なんでも相談してね。じやあ、僕は出るね」

一方的に言った大河は、最後に、にこっと笑って風呂場を後にした。その姿を見てのりおは、先ほどのアクアを思い出していた。

「あいつは・・・いったい誰なんだろうか？」

夜8時。葉巻学園の生徒たちは、全員風呂から上がった。バラバラになりながらも中央のロビーに向かった。セトたちは、世間話をしていた。

「もしもですが・・・富士山が噴火活動を開始し始めた、としたらどうなると思います？」

セトが、長い髪をタオルで拭きながら、みんなに聞いた。

「んゝ・・・もう三百年以上も噴火してないらしいし、大噴火になりそう」

「静岡のほうは大変なことになりそうだな」

「家が溶けたりもするのさ？」

「ここ、千葉も火山灰が降りそうだわ」

「逃げることは出来ないんですの？」

「逃げることは可能かもしれない。人間は、逃げ惑うことぐらいしか出来ない」

みんなそれぞれが、自分の思う『本音』を口にした。ひのりが、手をポンツと叩いた。

「あたしのいとこが静岡に住んでるんだけど、本当に富士山が噴火したら死んじゃうね。あははは」

ひのりが笑って言った。実際は、笑って済む話ではない。

「皆さん、ここからは真剣なお話です。聞いてください。

もしもこの周辺に火山灰が積もるとします。

その1シーンを頭に浮かべて見てください。

キラキラと火山灰が舞い降ります。綺麗だ、と思うのは最初のうち。

火山灰の積もる量はどんどん増え、積もり始めます。

そのうちに、火山灰の混じっているにこった雨が降り注ぎます。その雨は人体に影響を及ぼし、電力も停止します。

それが2週間以上も続く。

ね、大変なことになるでしょう・・・？」

セトは簡単な説明をした。その説明に、みんなは体を震わせた。

「なんか、分かりにくくてすみません」

セトたちはロビーに着き、椅子に座った。

「本当に想像しちゃうな・・・怖い」

「つまらない話ですみません」

セトが頭をかきながら言うと、アオイはセトの顔を見つめ、首を大きく振って否定した。

「つまらなくはないのさ！ とつても為になるのさ！」

「・・・ありがとうございます！ アオイちゃん！」

セトはアオイの手を握り、目をキラキラさせた。アオイもセトの手を握り返した。アオイとセト、二人の友情が深まった瞬間だった  
(?)

「そろそろ部屋に戻るぞー！」

ロビーに先生の声が響き、葉巻学園の生徒たちは立ち上がった。そして、先生の後について行った。

**第12話 風呂で、そしてロビーで。（後書き）**

こんにちは、読者様方。作者です。  
更新遅くなりました。

最近は楽しんで小説かいてます^^  
次はなるべく早く更新を・・・したいです！

であつ、また！

### 第13話 呪文めく言葉

深夜0時数分前。

窓から見える景色は暗く、もう町のビルなどは薄っすらとしか見えない。星や月が地上を照らす。

『太陽ほどじゃねえが、月も明るいぜえ』

ノアはパンチヨと並んで歩いていて。ここは明かりの付いていない、昼は太陽の、夜は月の明かりだけを頼りにして歩く、という廊下だった。

『そうね、綺麗だわ』

『オレ様はもう、綺麗なんて言う感情は忘れちゃったな』

パンチヨの言葉に即答すると、ノアは月明かりのあたる地上とそれを照らす月を交互に見つめた。

『久しぶりに、綺麗なんて思っちゃった』

『いつもこういう風に素直だと可愛いのにねえ、フッフ』

パンチヨも月を見つめた。すると、ノアがパンチヨに手招きをした。ノアはそつと窓を開け、外に出た。そして、座り込んだ。

『お前も座れ』

『うん』

パンチヨもノアの隣に座った。

風は、前の季節、『冬』と比べてみると、暖かった。今夜はあまり風は強くなかったが、それでも冷たく感じるのだから、風の強い日はもっと冷たいのだろうか。

『私たちの故郷、聖界<sup>せいがい</sup>には四季なんてなかったわね』

『だな。人間界はとてもとっていいほど美しい。しかし、せつかくの自然を人間が壊そうとしているのはなぜだろうか？』

『少なくとも、るい達じゃないわ』

『フ・・・お前は昔から人を信じ抜くタイプだったなあ？』

ノアは微笑みながら言うと、今度は目の前にあるカヌー場を見つめた。水面に映り、揺らぐ月がひとときわ輝いて見えた。

『お前にだけオレ様の秘密、ちつと教えてやろう』

『？』

ノアはパンチヨを近くに寄せ、そつと耳打ちをした。

『・・・まあ、喋り方とかをみれば男ね』

『つかさ、守護霊の中でオレ様だけ男だと居辛いんだよな。だから、他のやつにはオレ様は女だと言つといてくれ』

ノアはパンチヨに手を合わせて頼んだ。その様子を見て、パンチヨは快く頷いた。

しばらく2人は水面を見ていた。

突然パンチヨはノアの手を引き、外に飛び出した。

『な、何だよパンチヨ？？ 急に』

『るいたちの部屋は二階よ。行くわ』

二階の方面に向け、2人は飛び立った。



二階のセトたちの部屋は、寒いのに何故か窓が開いていた。風に純白のカーテンがなびいていた。るいたちが動く様子を見て、まだみんな起きている、とパンチヨは感じた。

「パンチヨ・・・？」

るいが目覚めた。すると連鎖的にみんなも起きた。だが、何故かセトは起きない。それどころか動く気配すら感じられない。

「セトちゃんは熟睡なのさ？」

「だな。疲れが出たんじゃないか？」

「カヌーとか漕ぐのは疲れたなあ、ははは・・・」

ひのりたちは眠くないらしく、かなりの時間喋っていた。その声はかなりうるさかったが、セトは動かない。実は、そこにセトの姿はなかった。布団を丸めて、人間がいるように見せかけていた。

セトは青少年の家の外で、楓たちを待っていた。背伸びをしたりしながら、気楽に。

「や、やつぱりいるのね」

「如月セト」

「やつと来ましたかあ。実は、お話ししたいんですよ」

セトは、笑いながら2人の手を引いてカナ―場に腰掛けた。そして、楓の目を見つめた後にカナの目を見つめた。楓とカナに寒気が走った。

「仲良く、楽しく過ごせたら、どんなにいいかと思いませんか？」

「・・・・・・は？」

2人は声を合わせて言った。

「そりゃ、楽しく過ごせたらいいと思うよ」

「でも、何でもかいつも悪口が・・・・」

言い終わった後、つい本音が出た2人は口を抑えた。セトはうんうんと頷いた。

「仲良しが一番。それはどんなに人間の心が闇に支配されようとも変わらないことなのです。2人はとっても素直ですね」

セトは天使のような笑みを浮かべた。その様子を見て、楓とカナもいつもより穏やかな顔になった。セトはもう一言付け加えた。

「いかなる時も、いかなる場合でも、友たちを信じ抜き、見捨てないことを私は願います。やがて訪れるかもしれない朽ち果てた未来を覆す、第一歩の前進になるならば・・・・」

セトの言葉は、どこか呪文めいていた。

### 第13話 呪文めく言葉（後書き）

早く更新するといっていたわりには遅くなってしまい、申し訳ございません！！！！！！

次の更新は未定です（遅くなるか、早くなるかすら分かりません）。

では、読者様（いないと思いますが）。また！

## 第14話 魔法の使い方

冷たい風はだんだん強くなり、先ほどにも増して寒くなった。セトのもとにリーフがやって来た。

「あなた達にも見えますか？ この、リーフという守護霊の姿が」

「え、ええ」

「見える・・・わ」

2人はゆっくり、軽く頷いた。

「全ての生き物は生き、そして死ぬ。それはどうやっても今の科学では覆せません」。あなたたちは、その宿命<sup>さだめ</sup>を背負って生まれてきた魂」

セトは月を見つめた。先ほどの月とは全く異なり、明るく黄色かった月が、不気味な笑みを浮かべているように紫色に変化している。「さ、中に入りましょう？」

セトは微笑み、2人に手を差し伸べた。カナはセトの手をつかんで立ち上がったが、楓は暗い顔をして座りこんだままだ。

「わたし・・・まだ如月セトがどんな人か分かりきっていないの。まだ、信じられないの・・・」

「始めのうちは、ひとを信じられないのは当たり前です・・・私もあなたを信じる。これで、信じてもらえますでしょうか？」

「かつ、考えておくわ」

楓は、建物の中に走って消えていった。カナも楓を走って追いかけた。

「行きましようです、リーちゃん」

『はいっ』

セトとリーフは歩いて建物の中へと入っていった。

「みんな、寝てますでしょうか？ 寝てなかったら私、どういい訳をすればいいのでしょうか？」

『大丈夫ですよ〜きつと。見てきますか〜？』

リーフが言くと、セトは頷いた。その姿を見たリーフは、部屋の方へと飛び立った。

「みんな、寝ていなかったらどうしましょう？ あ、そうか、トイレにいつていたといえはいいんですね？」

『セトちゃん、みんな寝てましたよ』

「よかったです〜、さあ、早く寝ないと明日は早いですよ」

セトは数回ジャンプしてから、部屋に走った。途中、転びそうになることもあったが、何とかバランスをとり、再び走り出した。

「誰ですかっ！ 走ってるのは！」

どこかの先生が、セトに向かって怒鳴った。寝ぼけているのかを確かめるため、セトは悪口をいって確認して見ることにした。

「うつさいです、この迷惑騒音ババア、腐った・・・」

「何言ってるのっ！ 私はまだ若いわ！」

どうやらこの先生は、寝ぼけてはいないようだ。どこかの先生は、セトの後を走って追ってきた。セトは必死になって逃げたが、つかまってしまった。

「覚悟しなさいっ！ おほほほ・・・」

『スリ〜プ・ザ・メロデー』

リズム良くリーフが叫ぶと、どこかの先生は倒れるように眠りについた。セトは先生の手をどかすと、リーフに今のことを尋ねた。

「今は、どうやったんですかっ!？」

『魔法ですよ〜う、はあはあ、きつとセトちゃんも練習すればできますよ〜。』

リーフは少しだけ息を切らしている。セトは心配した。

「息、切れてますが大丈夫ですか？」

『これも魔法を使うためですし〜、慣れましたから。魔法を使っているあいだは、息を止めないといけないんです〜』

「どうやら魔法を使うには、息を止めていないといけないらしかった。なんとも大変だ。」

「た、大変ですね〜・・・なるべく魔法を使わないでください。大変な負担になりますし」

『でもセトちゃんがピンチの時は、体力ギリギリまで魔法を使いますよ〜、えへ』

「そ、そんな、いいですよ〜、リーちゃん」

セトは首を思いっきり振りながら歩き出した。リーフも、けたけた笑い続けながら歩き始めた。

## 第14話 魔法の使い方（後書き）

遅くなりました（いつも言ってますが）。

ほんつとくに駄文ですね、これ。

（絶対いない）読者様、これからも支援をお願いいたします！（支援をしてくれる方なんて、きつといないですね）  
では！ またお会いいたしましょう

## 第15話 突然の問い

しばらく笑っていたセト達だったが、今度は迷惑をかけないように黙って歩き始めた。しばらくの間歩くと、自分たちの部屋が見えてきた。

静かに自分の部屋に入ると、真正面にある窓をふと見つめた。カーテンの揺れは強くなり、風も冷たくなってきた。ひのりたちは、セトがやってきても起きることなく、安らかに眠っている。

「みんな、よく寝ていますね、私も寝ないと。おやすみなさい、リーちゃん」

『ハイ！ おやすみなさい』

リーフに軽く挨拶をし、みんなを起こさないように、セトはこっそり布団に入った。先ほどまで、冷たい外にいたのだから、布団の中はあたたかく感じた。

セトがしばらく目を閉じていると、眠くなってきた。すると、リーフが小声で話し掛けてきた。

『セトちゃん、起こしてしまって大変申し訳ないのですが、



魔法を、使ってみたくはありませんか？」

リーフの言うことはあまりにも突然すぎた。セトは、驚いたあまり立ち上がり、2段ベッドに頭をぶつけてしまった。

「いたたた・・・ま、魔法なんていいですよ！ 私には必要ありません！」

ぶつけた頭を、そつとさすりながら、強くそう言ったセトだったが、実のところ心の中では、1度だけでも使ってみたいと思っていた。

『そうですか？ ほんとうは使いたいんじゃないですか？』

リーフはにやけながら呟き、最後に『素直じゃないですよ？』と付け足した。セトはあくまでも素直になれないらしく、首を振り、否定し続けた。

『ではでは尋ねますが、みんながもう既に魔法が使えるとしたら、セトちゃんは使います？』

「え・・・？」

リーフの言葉に、セトの動きが止まった。動揺したセトだったが、勿論リーフの言うことは嘘だ。ひのりたちは魔法が使えない。

「みんなも、魔法が使えるんですか・・・？ ならば！」

『もしもの話ですよ、もしもの。ではこれからみんなを起こして、魔法が使いたいか聞いてみましょうか？』

リーフは、どこで手に入れたか分からないメガホンを手に、ひのりたちをおこそうとしていた。リーフが、口にメガホンをあて、息を吸い込んだとき、セトは慌てて止めた。

「だっ、ダメですよー！ みんなは安らかに眠りに付いているんですから！」

『じゃあ起きたらにしましょうね。起こしてすみませんです』

リーフはぺこりと頭を下げ、暗闇に消えた。セトも1つ、頭を下げて眠りに付いた。セトは気づいていなかったが、いつのまにか、窓が閉まっていた。

翌朝6時。まだ太陽の光が窓から差し込んではいなかった。昨夜と比べては暖かく、やわらかく感じた。昨日遅く眠りについたセトは、まだ小さく寝息を立てて眠っている。毎朝、早起きのるいは5時半ごろからずっと起きていた。

るいは、起きていてもやることがなかったので、ベランダに出て微笑みながら、日の出る様子をそっと見守っていた。

「きれいだわ・・・太陽っていいわね」

小さく笑うと、少しだけうつむいた。その姿を見てパンチヨは、るいのすぐ後ろに来てから、るいの周りをふわふわ飛んだ。

「パンチヨ、今日はきつと快晴よ。・・・ところで、セトちゃんのことどう思う？」

るいはパンチヨのほうを向き、突然聞いた。パンチヨは、一瞬困ったような顔をした。そして、苦笑いをして小さな声で答えた。

『私は・・・』

## 第15話 突然の問い（後書き）

更新が遅くなった上、いつもより短くなってしまい、申し訳ございません！ こんな駄文でも読んでくださって感謝します！！

では、次もよろしくお願いします。

## 第16話 生体実験

「まだ詳しく分からないわ」

パンチヨは苦しそうな表情を見せた。こんなことを聞いてどうするの、と、パンチヨは疑問に思った。少し間を空けて、るいが口を開いた。

「そうね・・・私も分からない。あの子を生体実験したいけど・・・あの子のことは詳しく調べる必要があるわ」

「何を詳しく調べるのでございましょう？」

「それはあの子の体を1週間液体につけ・・・って、萌ちゃん!？」  
るいが気がつき振り向けば、萌がにやりと笑って立っていた。

生暖かい風が吹き荒れ、よりいっそう雰囲気を出す。

しばらく二人が見つめ合っていると、萌が怪しげな笑みを浮かべてくちを開いた。

「大丈夫ですわ。今のことは、聞かなかったことにするですわ。私も、そろそろ引越すのでございます。だからそれまで私が言わなければいいことですわ」

萌は、とたんに顔が悲しそうになった。どこか遠いところに、そろそろ引越すようだった。るいも何故か悲しそうな表情を見せた。「もしも私が誰かに言ってしまったら、用無しの私を殺せば良いことですよ?」

軽々しくそう言い、笑った後、るいと萌は部屋の中に入った。

(如月セト・・・1度あの子の生態を調べてみたいわね)

ボーン、ボーン、と少し錆び付いた古時計がなり響き、時計は6時を指していた。この時計は、実際の時間より遅れているようだった。再び、萌は眠りに付いたが、るいは起きていることに決めた。紙に、実験の様子を想像して書きはじめた。

「この水溶液にセトちゃんを入れるには・・・リーフに協力してもらいましょう。」

この液は、メタミドホスとパラチオンを大量に入れて・・・ついでに青汁も、ね。うふふふ」

小さく、そして不気味に笑ったるいは、調子に乗ってしまい、みんなが起きるまでずっとかき続けていた。しかし、青汁はたぶん関係ない。

「んーっ、すがすがしい朝だねーっ、ルナーっ」

「・・・うるさいぞ、ひのり。私はまだ寝る」

ひのりが話し掛けるが、ルナは眠いらしい。一生懸命、ルナを起こそうと体をさすっているうちに、ルナはイラつき、飛び起きた。

「あゝ、眠気が覚めたじゃないか!!」

「はっはっはゝ、あたしの根気の勝ちだね」

ひのりはピースをした。ルナは呆れたのか、ぐったりとしたまま、ひのりを見つめる。

しばらくすると、ルナは再び布団に潜り込んだ。それを見てひのりは、もう一度ルナを起こそうとした。しかし、跳ね除けられた。

「おーい、起きてくれよう。おーい、ルナ？ ルナちゃん!・・・ぶっ」

ルナは、もう既に熟睡していた。ひのりがどんなに体をさすつても、起きる気配がない。そんなルナに飽きたのか、ひのりも自分の布団に戻り、眠りについた。

「・・・セト？ 起きてる？」

布団に入り、眠ったかと思いきや、次のターゲットはセトになったらしい。自分の布団を脱ぎ捨て、セトの布団に向かい、セトの上で小さくジャンプを繰り返した。

「セトに、ダイレクトアタック！」

「んー、トラップ・・・発、どう・・・」

何とか答えたセトだが、すぐに眠りについてしまった。ひのりは、今度はるいの布団に向かった。しかし、るいはまだ、実験の様子の紙を書きつつづけていた。

「るーいつ・・・？」

「っ・・・！？」

紙を覗き込まれて困惑する、るい。それを見てひのりは、顔を歪めた。

「何を・・・しようとしてるの？」

「ひのりちゃんには・・・関係ないでしょ！ 覗き見はいけないわ」

るいはひのりをにらみ付けた。ひのりは、1歩退いた。しかし、負けじと言い返す。

「なんでそういうことを書くの？ 仲良く過ごそうよ！ ね？」

## 第16話 生体実験（後書き）

こんにちは、お久しぶりでございます。作者です。

自分でもびつくりするぐらい更新が遅くてごめんなさい！

1部分かりにくいところがあります。反省してます、ごめんなさい。

こんな駄文を読んでくれる方々！ 本当に感謝致します！

ではまた。

## 第17話 寂しいこと

「私は！ ただあの子の生体を調べたいだけよ！ ……あなたには、私の何もわからないわよ」

るいは、何かが気に入らなかつたらしく、ぷいっと後ろを向き、ひのりから目をそらした。ひのりは、少し言い過ぎたと思い、悲しそうに呟いた。

「ごめんね、るい。でもね、まだセトは転入して来たばかりなんだよ？ 差別はダメだよ。仲良くしょ？」

そのうち、ふと何かを思ったのか、ゆっくりとひのりを見つめたるい。

「いいわ、セトちゃんの生体実験を止めても良いけどねえ？ その代わりに」

ひのりは、急に態度が変わったるいを、どこか変だと思った。ひのりの背中に、寒気が走った。

「その代わりに・・・何？ セトちゃんが救われるなら、あたしはなんでもするよ？」

ひのりは、それなりに覚悟が出来ているようだ。

「いい覚悟だわ。友達のためには命をも賭ける。いいわねえ。じゃあ、あなたが如月セトの代わりに、生体実験用の生け贄になりなさい。さあ、手を貸しなさい」

「・・・言つと思った。覚悟は出来てる。いいよ」

ひのりはるいに腕を差し出した。るいはその手をぎゅっとつかみ、リュックサックから、緑色の液体の入った注射器を取り出した。



「この液体はね、メタミドホスとパラチオンと青汁をよく混ぜあわせたものなのよ。これを注射して、どんな反応が出るか見るの。どう？ 素敵でしょう」

「あはは・・・なんか怖いな、残酷だな。・・・っ！」

ひのりが声を上げたときには、既に注射器が腕に刺さっていた。緑の液体は、ひのりの体の中に入り、代わりに注射器には真っ赤な血が入っていた。

「大丈夫よ。あの液体を取り除く薬は、卒業式が終わったあとにあげるわ」

卒業式は2日後。それまで、緑の液体はひのりの体中をまわっている。ひのりは死への恐怖、そして自分の体の中を駆け巡る液体のせいで、倒れこんでしまった。

「ごぼっ・・・るい、セトは救われるんだよね・・・？」

「約束は守るわ。セトちゃんには手を出さない」

メタミドホスやパラチオンはかなりの有毒物質だ。このままでは、ひのりの体は何時間も持たない。

苦しそうにもがいていたひのりは、それを我慢して立ち上がり、るいの手を握り締めた。るいは、ひのりの行動に慌てた。

「寂しかったんだよね。構ってもらいたかったから、こうやってやってるんだよね。ここにいてあげるから、今だけ泣いていいよ。ほら、おいで」

ひのりは、るいをそっと抱き寄せた。

「やつ、ちょっと、離しなさい！ 私は寂しくなんかいいわよ！ 構ってもらいたくもないわよ！」

「嘘言わない！ スキンシップ、スキンシップ！」

ひのりはそう言った後、目をつぶり、布団へと倒れこんだ。緑の液体が効いてきたのか、ぐったりとしていて、まるで死体のようだった。

「私が間違っていた……。人間の体で実験なんて、バカなことを考えるんじゃない！ 私は、何を考えていたの……。？ 最後には……。最後には私なんか優しくしてくれたのに！」

るいは泣いていた。小さく、音も立てずに。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！ ああ、神よ！ どうかひのりちゃんを生き返らせて……。！」

『よかるう、汝の願い、この私がかえって差し上げよう』  
その声にるいが振り向くと、パンチヨが立っていた。

『叶えてやつても良いわ。ただし、条件があるわ。もう友達を傷つけないこと。守れる？』

「守れる！ 絶対守るわ！」

るいは大きく頷いた。パンチヨは難しい呪文のような言葉を唱え、息を2分間ほど止めた。すると、ひのりの体が突然ぴくつと動き始め、更には立ち上がることもできた。

「あれ？ あたし、死んだはずじゃ……」

「ごめんね、ごめんなさい、ひのりちゃん！ つ、絶対にもう誰も傷つけはしないわっ！ つく、だから……」

るいは必死になって泣きながら謝った。ひのりはるいの頭をなでた。

「あたしはるいを許すよ、ね！　よしよし、泣いた後は必ず笑いましょう！　はい、に　！！」

ひのりは笑って見せた。るいも目を紅く腫らして小さく笑った。

「よし！　みんなを起こそう！」

「ええ、そうね」

ひのりは再びセトの上に乗った。その衝撃でセトは「何！？」と言って飛び起き、上に乗っていたひのりは吹き飛ばされ、頭をぶつけた。

「ふん、ざまあみる」

ルナは鼻で笑った。

「なっ・・・ルナ！　あんたにもアタックするぞ！」

「何！？　来るな！」

ルナは、ひのりと反対の方向を向いた。ひのりはルナの上に乗ろうとしたが、ルナに蹴飛ばされ、あえなく失敗に終わった。

「ふん、バーカ、バーカ」

「ぎゃああああああ！　言うなー！」

「バーカ、バーカ、バーカ」

ルナはバカと連呼した。ひのりは狂ったように頭を抱えて叫んだ。そんな中、セトは再び寝始めた。るいは、ただ笑っていた。

（やっぱり私は寂しかったんだ。この居場所が、欲しかったんだわ）

## 第17話 寂しいこと（後書き）

どうやらかなりの間更新していなかったようです。

申し訳ございません！

なんとか17話目・・・！ まだまだ長くなりそうです。

では、また次のお話で。

## 第18話 2人だけの会話

「騒がしいですわよ？」

「・・・何かあったの？」

「なんなのさ？」

他に眠っていた3人も、続々と起きだし、部屋は大騒ぎになった。

コンコン

誰かが扉を叩く音がした。その後、扉がゆっくりと開いた。

「後15分ぐらいで飯だからなー、布団はあった場所に片付けておくように。後は部屋をはいて、何人か先生のところへ来い」

「はい」

しばらく騒いでいたセト達は、先生が来てから急に静かになった。みんなの迷惑にならないように、小声で話をしている。アオイと萌と藍は、三人で布団を持っていくことになった。

「我らが布団を出したのだから」

「当然なのさ！」

「後は頑張ってくださいですわー！」

後に残っている仕事は、部屋をはく、先生の手伝いの2つだ。セトとるいは、話したいことがあるようなので、部屋をはくことを選んだ。ひのりたちは先生の下へ向かった。

「セトちゃん・・・ごめんなさい？ 先生の手伝いに行きたかったかしら？」

るいは不安そうな顔でうつむいた。セトは「全然？」というような顔で笑った。

「で、なんですか？ 話と言つのは」

「わ・・・私・・・ね、ひ、人を、ここここ殺そうと・・・！」

セトは至って落ち着いているが、るいは慌てた様子だった。るいが慌てているのを見て、セトも「私、何かした!？」と慌て出した。

「まあまあ、落ち着きたまえ。そなた、人を殺そうとしたとな」

セトは、名探偵気取りの口調で、るいに尋ねた。るいはうつむいたままだ。

「誰をかね？ その問題には私もかわっているのかい？」

セトの問いに、るいは聞き取れないくらい小さな声で答えた。セトは何度も聞き返したが、るいは声の音量を上げようとはしない。

「ねえ、るいちゃん。私の声が聞こえますか？ 怯えないで……どうか私の顔を見てください。私は何にもしませんでしたよ？ お願いだから、私の声を聞いてください」

優しく、そつと自分の手をするいのほつぺたにあて、呟いた。るいも、少しだけ顔をセトに向けた。その目は既に輝きを失っていた。

「無理よ……セトちゃんに、あわせる顔がないの！ はつきり言うとな、私はあなたを殺そうとしていたの……ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

セトは、その事実を知っても、動揺一つせずにるいを抱きしめた。「殺そうとしていた、でしょう？ ならいいよ。殺した、じゃないから。私を殺す前に、きつと何かに気づけたんです。だから、あなたは人殺しではないのです」

にこつと笑うと、そうじ用具入れからほうきを取り出し、今まで使っていた部屋をはきはじめた。

「でもっ、ひのりちゃんに……」

「これ以上は言わなくて良いです。……これ以上言うと、傷つくのはあなたですよ」

セトは、るいにほうきを手渡した。

「さあ、はこう！」

セトは、やけに張り切っている。理由は、早く終わらせてご飯が食べたいからだ。その様子を見てるいも、涙をぬぐい、はき始めた。リーフとパンチョも、小さな布切れで壁を拭いている。

しばらく経ち、アオイたちやひのりたちのグループが帰ってきた。  
「そろそろご飯だってー」

ひのりはルナを連れて、スキップしながら食堂へ向かった。アオイと萌と藍も、話しながら食堂へ向かった。セトとるいは、道具の後始末をしてから食堂へ向かった。

『セトちゃん、るいちゃん、行っていいですか？』

『るい、置いていくわよ』

セトはリーフに、

「いいよ」

と言ったが、るいは、

「守護霊のくせに態度がでかいわよ！　ちょっと待ってなさい！」  
と言った。

『やだ』

るいはパンチョにきっぱりと言われ、そうじ用具をセトに手渡して、パンチョを追いかけた。

『守護霊はあんたを守ってやってんのよ？　ほら、頭が高いわ』

「私がいないと、あんたはいなかったのよ！　あんたこそ頭が高い！」

追いかけながら食堂に向かう2人。セトはリーフと、そうじ用具

を片付けてから、急いで食堂に向かった。



## 第18話 2人だけの会話（後書き）

こんにちは！ 作者です。

いつものように更新遅いですね・・・。

反省してます！ 本当です！

頑張って書いていくので、見捨てないでください（え

## 第19話 『1部』

食堂からは、いい匂いが漂っていた。今日のメニューはカレーだった。

「いえ〜い！ カレーだ〜！ やった、やった！」

セトは、幼い子供のように無邪気にはしゃいでいる。ひのりたちは、セトが落ち着くまで待った。

「お〜い、セト！ はしゃいでるとカレーこぼすよ？ おかわりはたくさんあるからさ！」

そう言っているひのりもはしゃいでいる。ルナは「人のこと、言えないだろう」と、呟いた。

セトたちは並び、カレーを取りに行った。

「おお〜、おいしそ〜！」

カレーは出来立てで、湯気が立っていた。セトは前のほうに並んだので、すぐにもらうことが出来た。セトは急いで席につき、1口味見をした。

「セト！ まずいつて」

「んーん、何を言う！ おいしーよ」

「そういうことじゃないよ！」

ひのりは呆れた顔をしている。セトはもう1口味見をした後、ぶすつとした顔でスプーンをおき、クラス全員がそろうのを待った。

「まったく・・・何一人で食ってんだか」

ひのりが呆れた顔で呟いた。その言葉を聞いて、セトは威張って答えた。

「何を言う！ これは毒味なのじゃ」

「威張って言うなー！ 単なるつまみ食いじゃい！」  
ひのりはセトにツッコミをした。セトは「愉快じゃの〜」と笑った。

クラス全員がそろい、いただきますの声が食堂に響いた。その声が響く前に、セトのカレーは3分の1程度しか残っていなかった。

「毒見サイコ！」

「セトちゃん・・・」

とりあえずセトをみんなで注意したが、セトは「毒見です」と繰り返し、聞こうとしなかった。るいが先生に言おうとしたが、ルナが止めた。

「こうして無邪気にしてられるのも、もう少しだけだ。だから、このままにおいてしてやれ」

るいには、ルナが何を言っているのかが分からなかった。ルナは視線をセトに戻し、微笑んだ。

「うわーい！ おかわりしてくるねー！」

「速っ！ 待ってセト〜、あたしも行くから！」

ひのりは急いでカレーを口を含み、飲み込んだ。そしてセトの後に並び、カレーを大盛りにもらった。最も、セトのほうが大盛りだった。

ふとひのりは立ち止まり、カレーを見つめた。

「じゃがいも、にんじん、たまねぎ・・・全てのカレーの材料。うん、カレーの材料だけに限らない。全ては豊かな自然がなければ成立しなかったのだ！　だよね？　セト」

ひのりが目を輝かせて振り向くと、そこにセトの姿はなかった。

セトは既に席に座り、2杯目のカレーを完食しようとしていた。

「へ？　なんか言いました？」

「いや、いいす・・・（なんか・・・恥ずかしい！）」

セトはひのりの言葉をまったく聞いていなかったようだ。ひのりは顔を赤くして席についた。セトは再びカレーをおかわりしに行った。

「前々から気になってただけどき、魔法ってどんなの？」

突然ひのりがみんなに尋ねた。セトとるとルナは顔を見合わせ、

頭を傾けた。

『1部は残酷』

『1部は人殺し！』

『1部はいらないわ』

『1部はこの世に必要なえな』

守護霊は次々に真剣な顔で話した。ルナは守護霊たちが必ず言う、

「1部は」と言う言葉に、どこか引くかかった。ルナだけでなく、

アクアとアオイも引くかかっていた。

『聖界せいがいに行けば分かるさ、1部だけの意味が。その言葉、引くかかっ  
てんだろう？　ルナ』

ルナを睨みつけ、少しでも微笑んだ。

「そんな時がくるのか？」

ルナは急に不安になった。いつか、得ても知れない場所、聖界と言う場所に行かなければならないのか。とてつもない不安に襲われた。

『もちろんだ。まさか、オレ様だけ行かせようと思うなよ?』  
「いつだ!」  
『今』

第19話 『1部』（後書き）

こんにちは。おひさしぶりです。

ほんと、意味不明な駄文ですみません！

これからも更新頑張ります。

## 第20話 大地震

『嘘だよ。まあ・・・いつかは行くときがくる』

ノアは小さなスプーンをどこから取り出し、ルナのカレーを黙って食べ始めた。その姿は、どこか寂しそうで、哀しそうだった。

『おい、ルナ！ カレーのおかわりをもってこい』

小さな体で、大きな皿を持ち上げた。ルナは心の中で、ハイハイと笑った。ノアをよく見ると、口の周りにカレーがついている。

ルナはパンチヨに頼んだ。

「パンチヨ、ノアの口を拭いてやれ」

突然指名されたパンチヨは、しぶしぶティッシュを小さく千切った。

『何で私が・・・まあいいわ、拭いてあげるからこっちに来なさい！』

『結構だ』

ノアは洋服でカレーを拭いた。今度は服にカレーがついた。

『あーあー、何やってんのよー！ 面倒よ！』

パンチヨはノアを叱った。そして、ノアのもとへ飛んでいき、ノアの服をふいた。ノアは顔を赤くしながら、その様子を見つめた。

『オレ様は、んなガキじゃねえ！』

あくまでも抵抗しようとするノアに怒ったのか、パンチヨは魔法を唱えた。

『うるさいっ！ ちょっと黙っててもらっわ。ジャンク・ドール！』

パンチヨが叫ぶと同時に、目や足、手などが取れた人形が3体、<sup>ジャンク</sup>ノアの周りを囲んだ。その人形に押さえつけられ、ノアは動けなくなった。

『まったく・・・服をちよつと拭くつてだけで大騒ぎね』  
そういいながらもにつこり笑い、カレーをふき取った。

『ごほつごほつ、パ、ンチョッ、自由にしろ、』

ジャンク

人形たちの押さえつけ行為は、だんだんエスカレートしていった。  
ノアの首を締めたり、手錠をかけようとしていた。

『どうもご苦労様。もう戻っていいわよ、人形達』

ジャンク

パンチョが緑のマントを取り出し、広げると、人形達はその中に  
吸い込まれるようにして消えていった。パンチョはマントをしまっ  
た。

『素直に拭かせてくれれば、苦しくなかったのに』  
そう小さく呟き、にこりと笑った。

そのとたん、地面が大きく左右にゆれた。かなり大きな地震のよ  
うだ。食堂中は大パニックになった。泣き崩れる人、大声で叫ぶ人  
などが多く見られた。

「じじじじ地震なの!？」

「怖いんですかゝひのりちゃん」

「ここここ怖くないよ!」

「声が震えてるぞ」

1分、2分と経ち、地震はおさまるように思えたが、何分経つて  
もおさまらなかつた。それどころか、より揺れは大きくなるばかり。  
「嫌だゝ、やっぱ怖いよー! 助けてーセトゝ、るいゝ!」  
「もう少しで・・・おさまるわ」

るいはひのりを落ち着かせた。ひのりは泣き始めた。



ガシャンと大きな音をたて、窓ガラスが割れた。幸い、その近くにいた者はいなく、けが人も出なかった。他の窓ガラスも、次々に割れていく。

「リーちゃん、これはどういうことなんです!?!」

『私にもさっぱりなんです! 聖界せいがいに関するかも知なんて、行つてきます!』

「頼みましたよ、リーフ」

リーフは白いマントをポケットから取り出し、そのマントを自分にかぶせた。何秒か経つと、いつのまにかリーフの姿は消えていた。「・・・このマントはどうなっているのでしょうか?」

セトは、地面が揺れているなか、しゃがんでマントを調べた。しかし、何も起こらなかった。

「まだ、おさまらないです」

「もう10分ぐらいこのままね・・・」

「ち、地球がおかしいっ!」

「いいや、地震が起こっているのはこの地域だけらしい」

4人はなぜなのか、と考え込んだ。

## 第20話 大地震（後書き）

みなさま、こんばんは。

いや、地震って怖いですね！ しかも大地震。

実際、大地震を体験したことないんで分からないんですが・・・

では、また。

## 第21話 いざ、聖界へ

『大変ですーっ！ せっせっ、せいかい聖界があーっ！』

マントの中から、傷だらけのリーフが飛び出してきた。洋服はボロボロで、小指の爪より上は千切れ、無くなっている。顔には無数の傷があり、そこから血が絶えることなく流れている。

「ど、どうしたんですか？ その傷・・・」

『今はそれどころじゃないんです！ ある地域では日照り、噴火、大火災、地割れで、もうひとつのある地域では大雨、土石流、洪水、土砂崩れ！ 最終的には、島が二つに割れて・・・』

リーフは、かなり慌てているようだった。痛々しい傷などには目をむけず、必死に聖界の状況を伝えようとしている。

「おちついて・・・いられない状況のようですね。島が二つに割れた上、異常気象・・・」

『みんなっ、聖界に来て欲しいのです！ 聖界を救ってください！』

地震はようやく止まり、みんなのパニックはおさまった。しかし、まだ聖界では異常気象が続いている。早く聖界に行き、異常気象を止めなければ、また何度も地震が起こる可能性がある。

「リーちゃん、私行きます」

「私も行く」

「あたしだって行く！」

「ボクも行くのさ」

「わ、私は・・・」

みんなが真剣な顔をして聖界に行こうとしている中、るいは行くのをためらっていた。

『クローンでもおいていけば、先生にはれないじゃない？ もしろん、時間はみんなが学園に戻ったところに止めるわよ、安心なさい』

「ありがとう、パンチヨ。わかったわ、私も行く」  
しばらく悩んでいたるいも、引き受けた。

『魔導なしではあの世界は危険です。あなた達に魔導力を与えます』  
「・・・お願いします、リーちゃん」

リーフはセトの前に立ち、手のひらと手の甲をセトの胸の前で合わせ、目を瞑った。すると、リーフの手から真つ白な光が出現した。それを掴み、優しくセトの胸の中に押し込んだ。

「わあ・・・ありがとう、リーちゃん！」

『いえいえ。じゃあ残りの人ならんでくださいね』

リーフは残りの人も順々に魔導力の塊を押し込んだ。

『アオイ・・・ボクたちはここに残ろう』

「そうほうがいいね。いつてらっしやい、みんな」

アオイとアクアはこの世界に残り、しばらくのあいだ地震の様子を見ることにした。そして、また地震が起こったらすぐ伝えられるように、リーフに通信機を渡された。

『私はルナさんとノア、そしてセトちゃんと日照りのほうへ向かいます。残りの人は、大雨のほうへ向かってください。通信機をお渡

しいたします』

リーフはパンチヨに通信機を渡した。その後、握手を交わした。

『みなさん、無事を祈ります』

『そっちこそ、生きて帰ってね』

二人は礼をして、握手の手を離れた。リーフとパンチヨはそれぞれマントを取り出し、広げて床に置いた。声をそろえて1、2、3と数え、マントをめくると、白いつむじのようなものが出来ていた。

「ひのりちゃん、るいちゃん、また会いましょうね？」

「もちろんだよ！」

「絶対よ！ 約束するわ」

「生きて帰る、それが守らなければならない約束だ」

生きて帰ると言う約束をし、それぞれ別のつむじに入った。互いの無事を祈りながら

セトたちはつむじの中を彷徨っていた。つむじの中は意外に広かったが、凍えるように寒かった。周りを見回しても何もなく、ただ白いだけだった。

「さつむいですね、ルナちゃん」

「寒いな……。ノア、セトにぴったりのジャンパーでも出してやれ」

『了解』

ルナは、セトが鼻水をたらし、震えているのを見て心配になったようだ。ノアは手のひらで光の塊を作り、そこからジャンパーを作

り出した。

『言っておくが、寒いのはこの通路だけだからな。ここを通り抜けたらこれは消滅する』

自分で作り出したジャンパーを指差した。

「ありがとうございます。・・・あつたかい！」

『ほら、お前の分もあるんだぜ？ ルナ』

「わ、私はいい。もうつくからな」

ルナが指差した先に、一筋の光が見えた。

## 第21話 いざ、聖界へ（後書き）

結構 はやく更新できた・・・かな？

こんにちは、読者様。

いつも読んでいただき、まことにありがとうございます。

早いもので、もう21話でございます。

では、また次回。

## 第22話 魔導力

### 第1グループ

光が見え、セトたちがつむじから飛び降りると、つむじは消滅した。

聖界は大変なことになっていた。火山は噴火し、溶岩が流れている。地面に亀裂が入っている。街中では、家が燃えさかっていた。パンチヨたちから連絡が入った。

『もしもし、リーフかしら。聖界に着いたわ。洪水と土石流で人が流されて、土砂崩れで人が埋まって、大雨で、大変なのよ』

『こちらリーフ。こっちも大変です、地割れ、火山の噴火、火災、日照りの被害がでています。引き続き調査をお願いいたします、では』

リーフは通信機を切り、火山のあたりを見つめた。

『まずはあの火山、黒炎山に行きましょう。溶岩を何とかしないと、人々は溶けます』

『そうだな。よし、行くぞ』

リーフとノアが先頭を切って、飛んで黒炎山に向かおうとしていた。しかし、セトとルナは空が飛べないので困惑していた。

『ああ、飛べないでしたね。出したいものを想像し、息を止め、目を瞑って手に力をこめてください。このとき、集中することです』  
ルナは言われたとおり、息を止め目を瞑り、手に力をこめ、集中した。

10秒もすると、丈夫そうな黒い雲が目の前に現れた。それに触って見ると、なんとなく硬かった。



「乗れるのか？」

『ええ、大丈夫です』

恐る恐る雲に乗った。すると、突き抜けることなく乗ることができた。

『セトちゃんもやってみてください』

「う、うん」

セトもルナのやったようにした。

3分もして、セトの息が限界に近くなった、目の前に大きめの青いたこが現れた。そのたこは、セトをじっと睨みつけている。

「こ、こんなのに乗れるのですか？」

『早くしろ、おいていくぜ？』

セトは、おいていかれるのは嫌なので、急いでそのたこにのつた。ところが、そのたこは暴れだし、セトに墨をはきかけた。

「ぎゃー！」

一人で地上に取り残されたセトは叫んだ。しかし、すぐ後ろからは溶岩がきているので、リーフたちは助けたくても助けることは出来ない。

「目が・・・見えない。ええい、たこ！ 早く行くだ！」

たこは一向に動こうとはしない。セトは後ろから溶岩がきていることに、目が見えないせいも全く気がついていないようだ。

「セト！ 後ろから溶岩がきてるぞ！」

「な、なにいつ！？ お願いします、たこさん！ 私を乗せてください！」

必死になつてたこにお願いするセト。すでに、溶岩はセトの足元に迫っている。セトも、そのことにようやく気がついたようだ。

するとたこは少しだけ動いた。溶岩にセトの足がつき、白いスニーカーが黒くなった。

「あぢい！！　お願いします！」

急いでたこに飛び乗った。するとたこはもう一度セトに墨を吐き、空中に浮いた。そして、ゆっくりとルナたちのもとへ向かった。

『セトちゃん！　やけどしてませんか？』

「そのうち治るよ」

『いいやだめだ。特別に、このオレ様が治療してやろう』

ノアが、背中に隠し持っていたナイフと包帯を取り出した。セトはお願いしますと頼み、足を出した。スニーカーはすでに溶けていて、足の小指は溶けかけている。

「いつて・・・」

『少し我慢しろ』

ノアは器用にナイフと包帯を使い、セトの傷を治している

と、思ったが・・・

「別に、足全部を巻かなくても・・・それにゆるゆるです」

『も、文句は無しだ！』

ノアは器用とはいえなかった。ルナとリーフは、それを見て呆れた。

「傷口は針と糸で見事に塞がってるがな・・・そのとき、セトは痛

「そうだったぞ？」

『包帯がゆるすぎるのです！ もっとぎゅうつと！』

『麻酔はかけてないから痛いのは当たり前なんだ、ルナ！ それとリーフ！ ぎゅつとやると痛いと思ってなあ？』

「ただ単にめんどくさいだけだろ」

ルナに凶星をつかれ、ぎくつとしたノア。そしてふざけながらの言い争いが始まった。そのあいだにリーフはセトの包帯を直している。

『おい、リーフ？ 忙しいところごめん』

アクアからの連絡が入った。声は震えている。

『何か、ありましたか？』

『また地震だよ！ もう20分はこうだ。おさまらない』

『そうですか……。こちらは負傷者が一人です。しかし、たいした問題はないです。引き続き待機をお願いいたします』

通信機を切り、リーフは複雑な表情になった。

## 第22話 魔導力（後書き）

結構早めの更新です！

溶岩の被害にあったことがないので、表現とかがイマイチ分らないんですが・・・へんてこなところがあったらご指摘ください。

たこは、海の中にいるたこです。

追記：更新が遅くなります。ご承知ください。

## 第23話 アオイの歌

『スニーカーはもう使えませんか。この世界では、人間界の服装は変でしょう。いつそのこと、全て着替えてしましましょう。2番目はルナちゃんですね』

リーフは息を止め、目を瞑って手に力をこめた。2分もすると、セトの服が大幅に変わった。

髪の色は前のままなのだが、ハンチングをかぶり、後ろでおだんごしぱりをしている。服は白のロングコートで、手首の部分に黒いラインが2本ある。

ロングコートの下に少しだけ見えるのは、黒い服と黒いジャージ。手には、白く輝く長いスティック。その先はサッカーボールが入るぐらいのわっかになっていて、その中に1本白い棒が、横に貫くように刺さっている。

靴は黒いスニーカーだった。

「白黒ですね」

『そう・・・です。でも、とてもお似合いですよ』

セトはリーフに褒められ、頭をかきながら礼を言った。

ルナの格好は、髪を二つにしばり、ロングコートだった。ロングコートの色は黒。ロングコートの下は濃い緑の服だった。

ルナの手にはスティックではなく、剣士が持つような銀色の長い剣があった。その剣に日光があたり、ぎらぎら光っている。

『ルナさんもお似合いです』  
ルナもリーフに頭を下げた。その後、もくもくと煙の上がる火山を見つめた。

## 現代

『また地震・・・もう床が抜けてるね』  
現代では、頻繁に起こる地震のせいで床が抜け、天上も剥がれ落ちていく。地震がくるたび連絡しなければならぬので、大変だ。  
『もしもしリーフ？ 今の状況を言っね。床が抜けて天上もはがれてる。人々は大パニックだ。引き続き、がんばってね！ じゃあ』  
急いで通信機を切り、地震が収まるまで抱き合って待った。この地震で倒れたり崩れたりしない、この建物はかなり丈夫である。

「早く、早く帰ってくるのさ、みんな」  
『今は信じて待つていただけだよ』

アオイは、アクアになだめられ、静かに座り込んでいた。しかし、地震が止まることはない。そのことよりも、みんなのパニック状態が気になっているアオイ。

「きゃー、きゃー！」

「もう、地球が終わってしまうよ」

他の学校の者は、生きる希望と地球の明日をあきらめ、目が死んでいる。萌と藍も黙って、地震がおさまるのを待っている。

「てめえら騒ぐな、殺すぞ」

一人の少年が、怖い目で目が死んでいる人をにらんだ。その少年は、のりおだった。

「の、のりおくん!？」

『どうも、のりおくん。ボクもこのまま見てるわけにはいけないね。さあ、少しでも元気になってもらおう。それがボクたちの使命だよ』

アクアは、目が死んでいる人々の前に立ち、一つ礼をした。これから何が始まるうとするのか、他の者には何一つ分からなかった。

地震が起こっている中、時折バランスを崩したりしたものの、きちんと前を向き、息を大きく吸った。高く飛び上がり、空中で2回転をした。

『みんなが地震を止めようと頑張っている。そのなかでボクらはただ待っているだけでいいのだろうか。いまこそ力をあわせ、戦うときだ。ボクに、どうか力を貸してください』

アクアが言い終えると、あちこちで喝采が起こった。

「俺たちは、何をすればいいんだ？」

『ボクはこれから、災害の威力を少しでも小さくする魔術を使う。その後ろで踊っていて欲しいんだ』

アクアの言葉に、人々は迷うものもいたが、大半は頷いた。早速、人々は準備についた。アクアは先頭にたち、斧の先端のほうを下に置いた。

『不格好でもいい、楽しく踊るんだ。愉快に、爽快に。さあ、踊ってくれ!』

「いくよー、せえのっ!」

失わないで 無邪気さと生きる希望

大切な者を 守りたいのならば

愛想笑いなんか 必要ないんだ

なんにも考えずに 心から笑うんだ

大切な者は いつだって傍にいてくれるから

いい調子でアオイが歌い始めた。それにあわせて他の者も、飛び跳ねたり回転したりして踊っている。アクアも斧で波動を作り、それを地面に叩きつけた。5分、10分と経ち、地震の威力は半分ほどにおさまった。

『ありがとう、みんな。地震の威力を半分に出来た。これ以上出来ることは、他の者を信じること。まだ仲間が頑張ってるんだ。信じて待ってよう』

人々は、アクアの言葉を聞いたあと、倒れこんだ。



## 第23話 アオイの歌（後書き）

更新が遅くなりました。お久しぶりです。

こういうシーンを書くのは、結構楽しかったです。これからもっと出てくると思います。

では、またお会いしましょう！

## 第24話 コゴウの登場、パンチヨの想い

### 第二グループ

ひのりたちは、洪水の地を目指し、歩いていた。大雨の中、この地帯では洪水が起きていた。

すでにひのりといは着替えていた。

ひのりはピンクのロングコートを着ていて、ひじまではあるだろう、綺麗で透き通った赤い手袋をしている。更に、薄いピンクのチヨーカーを首に巻いている。

手にははにわらしきものがあつた。靴はピンクのブーツだ。

一方るいは、新緑色のロングコートで、小指に緑色に光る（恐らくエメラルドの）指輪をはめていた。背中には、長い黄緑の翼が輝いていた。靴は緑色のヒールだ。

『まずは、住民を避難させるよ！ パンチヨ、よろしくね』

『ええ、任せて。私の愛しいジャンク・ドールたち、みんなを避難させてあげて』

るいはマントを広げ、前のようにガラクタの人形をだした。3体ほどの人形たちは、突然大きくなり、狂ったように叫んでいる人々のもとへ向かった。

「あの人形に任せておけばいいのね？」

『まあね。さあ、大雨を止めへ行こうかしら』

『ひのりちゃん、はにわを持って！』

言われたとおり、ひのりははにわを持った。ひのりとサンは、時

々目を合わせ合図をし、2人で一つのはにわを握った。すると、はにわが光りだした。

「サンツ、はにわが熱い」

『もうちよつと、我慢だよ』

今まで大雨だった空は、少しずつ晴れ始めた。

その時だった。

再び空が曇り始め、先ほどよりも空は黒くなり、雷が鳴りはじめた。その雷はるいをめがけて落ちてきた。るいは間一髪でよけた。

「危ないわね！ きつと誰かが仕組んだに違いないわ」

るいの勘は的中していた。奥のほうから、黒いタキシード、黒い帽子をかぶった男が現れた。再び雷がるいをめがけて落ち、るいは直撃してしまった。

「きゃあああああ！」

「るい！？ しっかりしてええ！」

『るいちゃん……！』

『誰よ！ 誰よ、るいちゃんを殺したのはあ！』

るいはぐったりして、ぴくりとも動かない。体はところどころ裂けたり、ちぎれたりしている。首の横のほうは、流血している。4人は立ち止まった。

「フフフ……人間どもよ、私はコゴウ。よく覚えておけ。恐らくその少女は死んではいないと思うね。何しに人間を連れてここに来たんだね？」

「サンとパンチヨは、何らかの理由でコゴウの事を知っている」

と言うことが、ひのりには感じ取れた。ひのりはるいをおぶり、後ろに下がった。

「どうしたのだ、いつものもう2人の姿が見えんが？ 別行動かね。少しばかり、答えたらどうなのだ、守護霊どもよ」

『せっかくだから、今は死にかけている素敵な人間が付けてくれた名前を教えてあげる。私はパンチヨよ。こっちはサンよ』

サンは頷いた。その後、ひのりにもっと下がるよう命じた。

「そうか、サン、パンチヨ……私にとってはどうでも良いがね。私はお前らを殺したり傷つけたりするだけで楽しいのだが」

コゴウは、人を殺したりするのを楽しんでいるようだった。そのとき、パンチヨのドールが戻ってきた。コゴウは、それを逃さなかった。

「こいつらは目障りだね、消えてもらおう」

『ま、さか……やつ、やめてっ！』

パンチヨが何か、悪い予感を感じ取った。その予感は見事にも当たってしまった。

コゴウが手をサッとあげると、再び雷が鳴りはじめた。パンチヨのドールたちに、先ほどのいが当たった雷よりももっと激しい雷が落ちた。

ドールは、真っ黒焦げになり、

「ゴゲゲゲゲゲ！」

と嘆きをあげていた。パンチヨの目から大粒の涙が零れた。

『……また、あの時のようになってしまったわ』

パンチヨたちがまだ聖界にいた頃、コゴウは今のような災害を引き起こした。

ある晴れた日、突然島が二つに分かれた。コゴウのせいだ。コゴウの雷は、今よりももっと強力で、島を真つ二つに分けることが出来るほどだった。コゴウは部下を従えて、大雨と日照りなどの災害を引き起こすよう命じた。

あの時もパンチヨのドールが犠牲になってしまったのだ。

たまたま後ろからやって来たドールたちを、コゴウは雷で殺したのだ。パンチヨは、いつもいっしょに遊んだりしていたドールが目の前で死ぬ姿に、恐怖を覚えたのだった。

その姿を見て、コゴウは笑っていた。面白い生き物でも見ているかのように。

「だからなんだと言うのだ。もう一度あの戦いをしてもいいのだがね」

『その前に私があなたを退治する』

「それはいい。が、残念だが、私はもう2人のもとへ行く。また会えたら、戦ってもいい。では」

コゴウは大きな黒い翼を広げ、暗黒に染まった空に消えていった。

## 第24話 コゴウの登場、パンチヨの想い（後書き）

こんにちは、作者です。

ロングコートと言ってもじっくり来ない方へ

ひぐらしのなく頃にで言えばレナのきてるやつ。

遊戯王で言えば、海馬瀬人の着ているもの。

みたいな？ です。

よくわからなかったら、ごめんなさい。では。

## 第25話 たこの意外なこと（前書き）

2話も間を空けると、話が分からなくなってしまうそうなので、第1グループのあらすじを書きます。混乱させてしまい、申し訳ございません。

リーフ、セト、ノア、ルナの4人は聖界へたどり着いた。まずは黒炎山へ向かうことにした。しかし、ルナとセトは飛ぶことは出来ない。

そこで、魔導力を初めて使い、とべるものを出すことになった。ルナはうまく成功したが、セトはうまくいかない。ようやくたこを出すものの、飛び立たない。

溶岩で足を焦がしてしまったが、ノアの手当で治る。

アクアから連絡が入り、人間界にも異変が起きていることを知る

## 第25話 たこの意外なこと

### 第1グループ

あたりは暗くなっているはずだった。本当ならば今は深夜0時過ぎ。本当の人間界では、月が出ていて、星が輝いていて、涼しくてもいい。しかし、このあたりは違うのだった。相変わらず太陽はジリジリ照りつけるし、不思議なことに眠気もなかった。4人もこの暑さで息が切れてきた。

「暑い、です」

『黒炎山付近だからです。はあ、暑い』

「あ。たこが！」

セトが乗っていたたこは、真っ赤になってよれよれになり、しおれている。仕方なく、ノアはじょうろを出し、たこにかけてやった。

「ぷしゅー！」

「わあっ!？」

たこはいつものように、セトに墨をかけた。再び水を上げると、たこはますます赤くなり、しわしわになっている。セトは怒って、「せつかく水を上げてるのに！火でも出しちゃえ」

といった。

しかしセトは、火の出し方だけでなく、魔導力の使い方さえ知らなかった。どうすることも出来なかった。戸惑うセトに、リーフが優しく教えた。

『そのスティックの前の部分を、たこに向けてください。頭の中で魔導力を使う様子を思い浮かべてください。目を瞑り、力を抜いて



ください。スティックが熱くなったら、完了です』

セトは言われたとおりにした。しかし、待っても待ってもスティックが熱くならない。そんな様子に呆れたのか、リーフは火を出してやった。

「ありがとうございます。たこにつけちゃって下さい」

『……止めたほうが良いと思いますが』

呟きながらも、リーフはたこに火をつけた。ところがたこは熱がるどころか、喜んでいる。どうやらこのたこは、火が好きなようだ。

『たこは普通、水が好きだった気がするんですが……』

「そう、ですね。と言うか、空を飛べる自体おかしいです」

セトとリーフが呆れている中、ルナとノアは青く染まった空を見つめていた。黒い物体がこっちに近づいたように見えたからだった。

「セト、リーフ！ 上を見る！」

「上？」

セトが見上げたときには、黒い物体はセトの真上にあった。そう、黒い物体はコゴウだった。コゴウはセトの上に着地した。

「ははははは、久しぶりだな、守護霊共よ！」

コゴウはセトのことなど気にせず、平気で話している。腕を組み、高らかに笑った。うつぶせ状態のセトは、しばらくじっとしていたが、我慢が出来ず、コゴウの足を掴んだ。

「いったいです       ！ どいてください！」

「ふん、いつからそこにいたのだ」

「あなたが降ってきたときからです！」

セトは立ち上がるうとするものの、コゴウが腰に乗っているため、立つに立てなかった。コゴウはその様子を見て、小さく笑った。

「しばらくぶりだなあ、守護霊。君たちにも名前が付いたんだろう」

『オレ様はノア。こっちはリーフだ。お前が何の用だ、コゴウ。パンチヨには会ったのか？』

「会った。一人負傷者がいるようだね。こっちも一人負傷者を出そうかね」

コゴウは上に手を伸ばした。雲一つない晴天の中で、雷を起こそうというのだろうか。

『セトちゃん！ 危ない！』

危険を察し、リーフが叫んだ。しかし、セトは身動きすら取れない。3人はセトを助けようと向かおうとした。何故か動けない。金縛りのようなもので、動けなくなっている。

「雷は無理だが、炎ならばいつでもお前に与えられる。さあ、喰らうがいい！」

コゴウはセトを金縛り状態にし、退いた。<sup>しりぞ</sup>セトは死を覚悟した。  
(私は、6年生にならないで死んじゃうのかな……)

真っ赤な炎が、勢いよくセトに近づく。セトはじっと目を瞑り、体が溶けるのを待った。

炎がセトに届くことはなかった。セトが乗っていたたこが、セトの盾となつて攻撃を防いでいる。むしろ、炎を浴びて元気になっているようだつた。

「しゅーぶしゅー！」

「こ、の私が、たこ如きに攻撃を防がれるだー！」

たこは墨を吐いて、炎を跳ね返した。コゴウはその場から離れ、立ち去った。

「ありがとう、たこさん！ たまには役に立つじゃないかー」  
「しゅーしゅー！」

たこは墨をセトに吐き、ちぢんだ。

## 第25話 たこの意外なこと（後書き）

このたこは炎が好きなようです。みなさん、いっぱいあげましょう！（え

こんにちは。前までは、更新が遅くなりました。

お話を考えるって、やっぱり楽しいです！ わーいわーい！

では、頭が狂ってしまったようなので、また。

## 第26話 黒い月（前書き）

現代グループのあらすじ

聖界でおこっている異変が、現代でも違う形で起こった。

震度6以上という地震が長い間続いているので、人は恐怖に震えていた。

そんな時、のりおがみんなを静めるため、少し乱暴な言葉を言う。

そのおかげで、アオイとアクアが魔法を使い、地震の威力を半減させた。

## 第26話 黒い月

現代

夜中。地震の被害は弱くなったものの、まだ揺れはある。油断は出来ないで、アオイとアクアは目をこすりながら起きていた。

『今までの地震は……震度3ぐらいかな。ちよつと気分転換行ってくるね』

アクアはアオイにこの場を任せ、ベランダに出た。

風は涼しく、時折強く吹いていた。木々が揺れ、街中では街灯がついているところもあった。ここまでの風景ならば、いつものように見ていた。おかしいとは思わなかった。

ただ一つ、いつもとは違うところがあった。

『月が黒い』

形はつきりせず、満月なのか三日月なのか新月なのかも分からなかった。アクアの記憶によると、昨日は三日月だったらいいのだとすると、新月はありえない。

アクアは考えた。雲が出ているわけでもない、新月でもない……と。

『世界が異常になっている……気がする』

月さえ見なければ、他はいつものような風景だった。月を見ないようにしようとしても、どうしてもそこに意識がいつてしまう。

『ボクは、この地球を救いたい。暗黒に染まった月じゃなくて、黄金色に輝く、綺麗な月が見たい。ね、ボクが救う。約束する』

呟くアクア。その声は小さく、他の誰にも聞かれていないようだった（最も、アクアの姿はアオイにしか見えていないが）。

アクアは、自身の透明な体を見つめ、部屋に入った。以前より、

透明さが増したように思えた。

「アクア……独り言？」

「ん？ ああ、うん。気にしないで」

世界がおかしいんじゃない、ボクがおかしいのか否か

アクアはアオイの体に戻るのではなく、アオイの横にちょこんと座った。アクアは、アオイに相談した。

「アオイ……外でね、月が黒かったんだ！」

「新月じゃなくて？」

「ううん、違うの！ 昨日は綺麗な三日月だったし！ でね、見て？ ボクの体、透明になっていつてるでしょ？ きつともうすぐ、消えちゃうか

「変なことしないで欲しい。希望を持って欲しいのさ」

アオイは真剣だった。黄色い瞳には、涙がたまっていた。時折涙を零しそうになるが、じっとこらえ、アクアを見つめている。

「ご、ごめん」

「わかればいいのさ」

場が険悪な雰囲気になった。1分、5分、10分と沈黙が続いた。

すると、アオイがずっと目にためていた涙を零した。その後、涙は絶えず零れ続けた。アオイは、唇を噛み締めたり涙を拭いたりするが、涙は絶えなかった。

「アオイッ！？ ななななな泣かないで！」

「え、あ、あれ？ おかしい、な。……ボクはっ、泣きたくない、はずなのにつ」

アクアは困惑し、慌てた。拳句の果てに考え付いたことは、アオイを抱きしめてあげることだった。しかし、実体のない彼女は、アオイに触れられなかった。

『ボクに体があれば……実体があれば君を抱きしめてあげられたのに』

「うう、ん。いいんだ、よ。っ、ありがとう……」

アオイの涙はまだ枯れ果てなかったが、涙を拭いながら小さく礼をした。

アクアは、まだ黄色い姿を見せない黒い月に願った。

お月様、

どうか願いが一つかなうならば、  
魔法なんていりません。ただ、

みんなと同じ体をお与えください。

これ以上何も望みません。

透明な体とちゃんと触れる体を取り替えてください。

アオイを抱きしめられる体を、ください

## 第26話 黒い月（後書き）

今回は短めです。

なんか、月齢とか調べるのが楽しかったです。

私、いつが満月だとか新月だとか分からないんで……。

月のお話は、また書いてみたいなあって思います（番外編とか、特別編とかで）！！

では、また！



## 第27話 幼女（前書き）

### 第2グループのあらすじ

大洪水の地を目指して、4人は歩いていった。人々を避難させるために、パンチヨはジャンク・ドールを出し、避難させた。

そんな時、コゴウと名乗る男が現れる。その男は、いきなりいかに雷を落とし、るいは倒れてしまう。そんな時、パンチヨのドールが戻ってくる。ドールも、るいのようになった。

またあのときのようになったとパンチヨは言う。あときもこのような感じだったらしいのだ。

戦おうとするパンチヨをよそに、コゴウはもう1グループのほうへ向かって行った。

## 第27話 幼女

### 第2グループ

「るい……！ 死なないで、死んじゃだよおっ！」

未だにるいは起きない。ひのりが耳元で大声で叫んでも、パンチヨが魔法をかけても、1ミリも動かない。まるで、道端で死んでいる蟬のようだった。

「るい！ 起きないとっ、殺しちゃ、うよっ！ ねえ、聞こえて、るんでしょ！」

ひのりは声を枯らせて泣きじゃくり、はにわを構えた。はにわからは既にビームが飛びそうだった。サンはそれを手で止めた。

「ひのりちゃん、落ち着いて。本当に殺しちゃ、余計起きないよ？ ひのりちゃんは、成功を祈っていて。あたしとパンチヨに任せてね。さあ、パンチヨ！ いくくよう！」

「いいけど……成功率は3%ぐらいよ？ 賭けてみるしかないわ」  
パンチヨとサンはマントを構えた。そして5秒間ほど目を瞑り、いきなりかつ、と目を見開いた。マントがひらりと揺れた。

それと同時に、マントから激しい光が発生した。あたりは黄色い光に包まれた。

「な、にこの光……！」

「お、おかしいかも！ こんなこと起こったこと、1度もなかったよ！」

『成功率は1%に縮んだかしら？』

サンとパンチヨの慌てようによると、とてつもなく大変らしい。しかし、黄色い光は止まることなく、るいに向かっていく。

『あぶないっ！』

サンが叫んだときにはもう遅かった。るいに黄色い光は直撃した。

その時だった。

「ん……え？」

今までぐったりしていたるいが、突然起き上がり、光はるいの顔に直撃した。

「あああああああああ！？」

意味不明な叫び声。るいの頬に傷が出来てしまった。それだけで済んだ理由は、目の前に透明な物体が来たからなのだった。

「パンチヨ……痛いじゃないの！ 何をするのよ、全くもう！」

「ち、ちがうの！ みんなね、るいのことを助けようとしてたの！  
ごめん……」

ひのりはるいに頭を下げた。るいは首をかしげながらも、何度か頷いた。

「誰なのかしら……」

「え？」

「私を助けてくれた透明な……その……？」

るいはまたしても首をかしげた。透明な物体とは、ひのりたちには理解不能だった。何のことかも分からない。分からないので、ほうっておくことにした。

「うえ　　ん！……！」

ひのりの耳元で、泣く声がした。耳を破壊するほどの大きな声。特に耳元では、かなり、いや、とてつもなく大変な大きさ。

「うるさ　　あい！」

「あ、ご、ごめんなさいいっ！」

ぴたりと音が止んだ。先ほどまで透明だった物体は、姿をあらわした。真っ青なドレスを纏っており、髪の後ろに藍色のリボンを結えてある。6〜8歳ぐらいの女の子だった。

「私……マイっていいいます。魔導士に憧れてて、練習してたら……いきなり変なのが突っ込んで来まして……大声出してごめんなさい！」

マイと名乗る幼女は、泣きそうな顔で頭を下げた。

「い、いいわよ！ 守ってくれて嬉しかったわ」

「いいえ、私が悪いんです。お詫びと言ってはなんですが、私も、この世界を救いたいです！ あなた達に、付いていかせて下さい！」

マイはにこつと笑ってるいの服のすそを引つ張った。るいとひのりは顔を見合わせ、サンとパンチョもまた、顔を見合わせている。

「無理だと……思うよ？ セトに電話して聞いてみるけど……」  
ひのりは通信機を手にとり、電話をかけた。リーフがでた。

『ハイ、こちら第1グループ、リーフ。どうかなさいましたか？』

「リーフ、セトはいる？」

リーフはすぐに『ハイ』といい、セトに代わってくれた。

「もしもしー？ ひのりちゃん」

「ここに、小さい女の子がいるんだけど、連れて行っても良いかな？」

セトは少し黙っていたが、状況が分かると、答えた。

「いいんじゃないですか？ その子に人生の厳しさと楽しさを教えてあげてください」

それだけ言つて、電話は切れた。ひのりは、あまり納得がいかなかった。せめて、両親の許可が下りてからにしよう、という考えが浮かんだ。

「そうだ、お父さんの許可を入れな  
「いないよ」

## 第27話 幼女（後書き）

うわぁ、更新遅っ！

すみませんでした。1か月以上も更新してなくて……。

どうしたら皆さんの信頼を取り戻せるか分かりません。心から謝罪いたします！ すいません！

## 第28話 マイの過去（前書き）

今回は、2話連続なんで、書かなくてもいいですかね？  
すみません！ めんどうなだけなんです！ ごめんなさい！  
ということ、本編どうぞ！

## 第28話　マイの過去

### 第2グループ

「お父さんは、死にました。聞いたことありませんか？　監禁されて、拳銃を突きつけられ、ばーん」

マイの表情が陰しくなった。時折、泣きそうにもなり、るいとひのりになだめられた。

「あんな父親、死んでもよかった！　私に暴力ふるって、痛めつけて、笑ってる人だから！　お母さんだって！　私を見捨てて、出ていったのおおー！！」

マイが暴れ出した。マイの心の奥底から、怒り、憎しみ、孤独、死の感情が込み上げてきた。親に捨てられ、一人で生きていたこの子に、一体何を教えられるのか、ひのりには分からなかった。

「……あたしたちと来たいの？」

「うん……」

なんだか、マイが憎らしく思えた。泣けば済む、と思っていそうなその顔は、ひのりを更に苛立たせた。マイは、暴れてはいないが、泣いている。

「みんなはどう？」

「私たちに聞かれても……ねえ、パンチョ？」

『ええ、任せるわ』

『ひのりちゃんに任せるー！』

なんて、人任せ

「どうだろ。こんな小娘、邪魔なだけじゃない？」

そう言って、マイを睨みつけた。マイは、怯えている。

「いい？　あたしたちと来たいなら、泣くなッ！　怯えたり、暴れ

たりするのはガキのやることなんだよッ！ 生半端な気持ちで魔導士になんかなれると思うなッ！ お前なんか連れて行くかつ」

『まっ、まあまあ、おちっこ、ひのりちゃん？』

「うるっさいなあ？ あんたは任せるって言ったでしょ！」

ひのりは、マイのような人が苦手であった。年齢によって差別され、最終的にはどんなに相手が悪くたって、相手が有利になる。ひのりはそう思っていた。

「あたしは 断固嫌です、こんな女。いこ。るい、パンチヨ、サン」

ひのりが先頭を切り、大雨の中、進んでいった。

## 第1グループ

ここは火山付近。噴火しそうだが、何とか耐えているようだった。セトは、リーフに魔導力の使い方を教わっていた。ルナとノアは、ストレッチ。

『ちっがあーう！ 心をこめて！ もう一回』

「ううゝ、はい」

リーフは杖を軽々とまわし、決めポーズまで作っている。セトの動きは、ぎくしゃくしている。杖をときどき落とすし、実技のときは、魔導波がでなくなる。

『心がこもってるのはわかるけど……右手はもう少し上を持って。左は3分の2ぐらい。そうそう』

「うん、こうだね？」

『そうそう。じゃあ、魔導力を使ってみて下さい』

リーフは即座に的を用意した。セトは目の前の的の中心を狙って、精神を集中した。セトの周りを白い炎が包む。

「うつ……りやああああ！」



『おおっ！』

セトの魔導波は、惜しくも的から外れた。的からかなりずれてしまったものの、リーフは笑って拍手をした。セトは汗をかきながら、必死に練習している。

『もうちょい！ 1回お手本です』

『はい！』

リーフは片手に杖を持ち、軽々と魔導波を放った。的は少し焦げた。

『努力すれば、きっと出来ます。私も馴れるには、時間がかかりました』

こくと頷くセト。

また、練習を始めた。杖を持つ位置を、少しずつ変えていつている。リーフも、杖を持つ位置、構え方などを、細かく教えている。

『いきますよ、リーちゃん』

『ええ、どうぞ』

セトは力いっぱい魔導波を放った。いくつかに分かれた波動は、曲がりくねって的方向に向かった。力強かった波動は、的を粉々に破壊した。

『で……出来た。出来たああ！』

『やったじゃないですか、セトちゃん！』

的に見事当たったセトは、波動のコントロールを教えられることになった。

セトは波動を出すとき、コントロールを全く考えずに行っていた。おこな的に当たったのは、偶然と言っても良いらしい。この先、コントロールがうまくないと、見当はずれの方角にいつてしまう可能性も、十分ある。

ということ、セトは修行を続ける。

## 第28話 マイの過去（後書き）

遅くなりました！

書くのは楽しかったんですが、のんびり書いていて……。  
とにかくすみませんです。

こんな駄文でも、楽しんでくれる方がいたら何よりです。

## 第29話 溶岩（前書き）

第1グループのあらすじ

黒炎山付近到着。

セトのたこがしわしわになっている。せつかく乗せてもらった御礼に、水でも出してやった。すると、墨を吐きかけた。怒ったセトは、火を出してやろうとした。

しかし、出し方が分からなかった。戸惑うセトに、リーフは教えた。待つても待つても何も出なかったのに呆れたリーフは、火を出してやった。それをセトの命令で、たこにあてた。たこは喜んだ。

コゴウが空から降ってきた。真下にいたセトのことを、ふんだ。必死に立ち上がろうとしたが、重くて無理だった。

コゴウは第2グループのほうに負傷者がいたことを知らせ、こっちにも負傷者を出そうとする。雷は無理だが、炎を出して攻撃してくる。

たこは盾となり、攻撃を防いだ。よほどくやしかったのか、コゴウは立ち去った。

## 第29話 溶岩

### 第1グループ

セトは、リーフの指導のもと、未だに修行をしている。ルナとノアもストレッチが終わったらしく、今度は魔導の練習を始めた。

「ルナ、これだけは言わせてもらおう。お前のコントロール、パワーは申し分ない。ただ、持久力をつけようぜ？」

「はあ、はあ……、持久、力？」

「マラソンだマラソン！ ほら、行け！」

2人は、その辺をぐるぐる回り始めた。ノアは、後ろについて背中を押してあげたり、波動を放ったりし、ルナに手助けをしていた。た。

「もつと、走れるだろう？」

「私が、じきゅ、りよく、無いの……知ってる、だろ！」

「えー？ 聞こえんなあ？」

「もう、おまえ死ねっ！」

ルナはノアに波動を放った。その結果、ノアは石に当たって気絶寸前。途切れ途切れに笑いながら呼吸をし、セトたちのほうにむかった。

「ふう。随分がんばってるようだなあ、セト？」

「あつたりまえです！ 私だけ遅れてるみたいで嫌なんで。ぜーったいに、負けませんよっ！」

「いや、」

ルナはそこで言葉を止め、目を閉じ、耳をすませた。地響きがはつきりと聞こえる。セトとリーフ、そして石に張り付いていたノアも、その異変に気がついたようだった。

「地面がないている？」

『いや、正確に言うと、黒炎山だ』

ノアの発言の直後、大きな爆発音が聞こえた。黒炎山から、溶岩が流れ出しているのが見えた。このままぼーっとしていると、みんなおだぶつになってしまう。

『まずいです……みなさん、飛びましょう！』

ルナはすんなり雲を出し、のった。セトもたこをだし、とび上がった。守護霊たちは何も無しで飛べるので、苦勞することはなかった。

「あつっ！ あついですよここ！」

『作業開始ですー！』

「ど、どうやって！」

『うゝん……？』

セトは、溶岩は一度体験したことがあるが、何度体験しても馴れるということはなく、あついただけであった。ふと、セトはいい考えが浮かんだ。

たこに、この溶岩を食べてもらおう、と。

「さあ、たこ！ 全部食べてください！」

『セツ、セトちゃん！ 無茶ですよ！』

「大丈夫です。ここは、信じてみませんか？」

たこの興奮は止まらない。あの、赤く高温の溶岩を見て、息が荒くなっている。これ全部食べていいの！？ と言わんばかりであった。

たこは、溶岩にだんだん近づいていく。勿論、背中にセトを乗せて。

「え……？ ちょ、ま、私を下ろしてから行ってくださいっ！」

セトの言うことも、今のたこには聞こえていない。そんな様子を見ていらなかったルナは、セトの手を引っ張り、救助した。たこにはそんな関係ないようで、目を輝かせて溶岩へと進む。

「ぶしゅ ……！！ しゅうううう！」

たこはやけどしないのだろうか、と不安そうに思ったり、おいしそうに食べるなあ、と嬉しそうに見てみたり。まあ、簡単に言えば『どっちの思いも五分五分』であった。

（大変そうだな。ちよっと、手伝ってやろうかな）

セトは、さすがに量が多すぎるかとおもい、水を出して作業を手伝おうとした。

『いいこと考えました！ 溶岩を水で固めて、杖にしまっておいて、たこが食べたいときにいつでもあげられるんじゃないですか！？』

「リーちゃん、その考えいい！」

早速、作業に取り掛かった。セト以外は水を溶岩へかけている。

セトは、たこの保護者として溶岩をしまっておくことになった。

「これでいいだろ。セト、今から私たちが」

『魔法をかけまゝす』

『この溶岩が杖に収納しているときにあつくならないように、だ』  
ルナ、ノア、そしてリーフは、変な呪文をこによごに言っている。声が小さくてこによごによごしているのではない。セトには理解不能だったのだ。

「……すごい」

溶岩は見る見るうちに固まっていくな。セトは杖の先端部分を開けて、溶岩をしまいこもうとした。しかし、全くと言っても良いほど入れ方が分からなかった。

『ああ、入れるにはですね、ん、自分で呪文決めちゃってください！』

「えゝ！」

突然に言われて、どんな呪文が思いつくだろうか。セトは全く分からなかった。

『じゃ、時間無いので、私が決めた呪文を言ってもらいますよ』

「それは、後から変更できるんですか？」

『ええ。今は急ぎなんで。では、こう言っして下さい。』

タベタイナ オコメディスク タベタイナ』

その変な呪文に、しばらく思考が止まったセト。

「な、なんなんですかっ！ そんな変な呪文は！」

『まあまあ、急いでくださいよ。はい、せーのっ！』

「う……（もうしょうがない！）タベタイナ オコメディスク タベタイナ！」

すると、その変な呪文からは想像できないようなことが起こった。溶岩がセトの杖に収まっていく。

『全部、入りました！ たこ、ちよつとあげる』

杖の先端部分を開けて、溶岩を少ししたこにかけた。たこは飛び跳ねて喜ぶ。セトはその様子を見て、私は幸せだ、と思った。

今は。

## 第29話 溶岩（後書き）

遅くなりました！ すみません！

たこはこれから、重要なものになる（？）かもしれませんが、期待しないで待っていてください！

では、また次のお話で。



### 第30話 ひのりVSマイ！ 短い戦い（前書き）

#### 第2グループのあらすじ

お父さんは死んだと言うマイ。お母さんも自分を見捨てて出て行ったという。また、大きな声で泣き出す。そんなマイをひのりは、「泣けばいいと思っている」と思い込み、乱暴な言葉をはき捨てる。ついには、マイをおいて雨の中を進んでいつてしまった。

#### 第1グループのあらすじ

・・・はいいか。

1話前ですもんね（面倒くさいだけ）。すみません、こんなただけで！

### 第30話 ひのりVSマイ！ 短い戦い

#### 第2グループ

るいは、少し浮かない顔をしていた。本当にマイを置いてきてもよかったのか、と。ひのりはかなり前をずんずん進んでいくし、他のみんなも、さほど気にしていないようだった。

「ね、ねえ？ パンチヨ。いいのかしら？ あの少女のこと」

『はあー……人間って、こんなに鈍かったのね。それなら気にする必要はないわ。後ろ』

パンチヨは振り向かず後ろを指差した。るいは、パンチヨの言葉にむつとしながらも振り向いた。

木の陰からチラツと見えたのは、黒のような青のような、暗い系の布。少し蠢くその正体がどうしても気になったるいは後ろに戻って、正体を突き止めようとした。

「勝手は許さないよ、るい」

2、3歩進んだところで呼び止められた。びくつとして振り向く。振り向いた先には、立ち止まってはいるがこつちを見ていないひのりがいた。

「ど、どうしてこつちを見ていないのに様子がわかるの……？」

「んー、なんでだろうね。ま、るいには関係ないし。それよりさ」

ひのりは振り向いた。その瞳には、もう既にるいは映っていないかった。むしろ、光すら映っていないかった。

「いつまで隠れていられるかな、待ってみよ。ね、マイちゃん？」

「い、つから……？」

「ずうーと前からだよー？ あれれれ、分からないとも思ってたのかな？ あたしのことをなめてるんだ。……こつちにおいでよ、

「ストーカーマイちゃん？」

マイは1歩木の横にずれたが、しゃがみ込んで頭を抱えた。そして、ひのりのことを鋭く睨みつけた。一方のひのりは、そんなものに怯むわけもなかった。

「怖がらなくても良いよ、こつち来て。今は何にもしないよ。素直に言うこと聞いて？」

「私も連れて行ってくれたって良いじゃないですかあ」

「じゃ、そのための試験をする。そのために呼んでるんじゃない。早く、こつち来いよ」

その言葉にびくびくしながらも、マイは恐る恐る立ち上がった。

「試験ってなんですか」

「お前を連れて行くためのー。本当はこんな暇ないんだけどね、特別。それなりの能力があつたら連れてってあげるよ？ どうする？」

ひのりは既に戦闘体勢に入っている。

マイめがけて、はにわを振りおろす準備をしている。

「やります！ 私は行きたいんです」

マイも負けていられなくなり、杖を握りしめた。マイの杖は、杖というよりもスティックというのふさわしい。両先端部分に、紅い水晶が輝いていた。

ひのりはマイに飛び掛かった。かなり距離があるはずなのにひのりは楽そうだった。マイは1歩遅れて構えた。ひのりははにわでマイを、力いっぱい殴りつけた。

「あ……ッが」

ひのりのもっているのはにわは、普通の土器を作る粘土で作られたのではない。どんなに叩こうが踏みつけようが、決して割れない鉱石で作られている。

「あれま、以外にあつさりだったね？ それで終わり！？ 時間取っておいて？ ヘーえ、じゃああたしたちもういくね！？ それで

良いんでしょ、答えるマイ！」

ひのりの後続く者はいなかった。るいも、パンチョも、サンも、みんな口をぽかりとあけている。マイも、手を前について跪いている。

「うつ……わ、たしもお」

先ほどの衝撃がまだ残っているのか、マイは力なく地面に突っ伏した。血が、マイの額を流れていく。やがてその血は、マイの目に入り、頬を伝って地面へ落ちた。

「さすがに、ここまでする必要はなかったわ」

「るいはあたしのこと、分かってないよ。あたしがどれだけこの子を嫌っていたか。それに、たった1発殴っただけ。罪悪感がないなんてことはない。あたしだって人間だもん、罪悪感を感じる……」

ひのりは泣き出した。今まで溜まっていた自分の「悪」を、全て吐き出すかのように思い切り泣いた。大粒の涙をたくさん零した。

「どうしていいか、分からな、かったの。あたし、小さい子きらい、じゃん？ とにかく、自分の意見、を、通したかった、の！」

「わたしが、わかるか、たんです」

倒れていたはずのマイが小さく口を開いた。

「聞いてた？ あたし、は、小さい、子、嫌いなもの！ だけど、だけれどおっ！ 努力するよ、努力してあんたを好きになるから！ だから、来ても、良いよ。頭、痛かったでしょ？」

ひのりはマイのもとへ走った。倒れているマイを抱えて、抱きしめた。

ひのりが幼女を抱きしめられたのは、初めてのことだった。マイも、頭が痛いのを我慢して抱きしめ返して言った。

「ありがとうございます。」

### 第30話 ひのりVSマイ！ 短い戦い（後書き）

ちょっとひのりの設定忘れてました（・3・）

更新遅れました。いやあ、さすがに毎日更新は無理です。でも、なるべく早く更新が夏休みの目標です。

では、また次のお話で。

### 第31話 セトの魔法

#### 第1グループ

「ん……これと言っていい呪文はないんですね。というか、思いつかないんです」

『良いじゃないですか、タバタイナのやつで。食べたい気持ちでいっぱいじゃないですか!』

「嫌です! そんな変なダサイ呪文」

「変」「ダサイ」その言葉一つ一つがリーフにとげとなり、突き刺さる。

結局4人は立ち止まって、呪文を考えることになった。

セトとリーフは特に呪文のことで悩んでいた。リーフはそのままでいいと言うが、セトはどうしても気にいらなかった。このまま気にいらなかったら、先にも進めない。

『なるべく早くしてくださいよ、暑くてたまらないのです』

「リーちゃんも考えてくださいよ。七五調じゃないとだめですか?」

『そんなことはありません。何でも良いですよ』

それだけ言うと、ノアと訓練のようなものを始めてしまった。

「私も手伝おうか?」

「はいいい! お願いしますうう!」

ルナはセトの近くへ行き、座り込んで呪文を考えた。全くアイデアが浮かばない。

「……少しぐらい」

「……ん?」

「少しぐらい長くなった方がいいんじゃないか? だが、そんなに長く考える時間はない。急ごう」

(急げないんですね、それが)

セトは頭を最高速度で回転させるのだが、ルナはどこか遠くを見つめているようだった。

「我は天に選ばれしもの。世界に光を、我に波動を」

呪文のように呟くルナ。その声が、あまりにも小さすぎて。セトに聞こえているかどうか分からない。セトはまだ腕を組んで考えているようだから、聞こえていないのだろう。

「聞こえてたか？ 今言つてやつただけど？」

「えっ……ごめんなさい、聞いてなかったです」

「はぁー……我は天に選ばれしもの。世界に光を、我に波動を。これでもいいか？」

「うわ……すごい傑作！ 採用採用」

セトは急ににこやかになり、大きく手を叩いた。ルナは呆れた目でセトを見る。

まあ、とにかく。これでセトの呪文は決まった。やっと先に進める。ここまで私たちを待たせたんだから、早速セトの腕前を見せてもらいたいものだ、とルナは思う。

「じゃ、練習しよう！ って言つても、どうやって？」

「早く、次の目的地に行かないか？ 練習にもなる」

「あ、そうだったね！ ごめんなさい」

そついいながら固まった溶岩をたこにあげるセト。ルナも雲を出し、乗る準備をした。

「リーフ、ノア！ そろそろ行くぞ」

『はい、分かりました！』

ノアとリーフは戦闘を止め、二人の肩に乗った。あとはセトの準備が出来るだけ。そう、誰もが考えていた。そのときだった。

「なあ、上」

『はぁ？ 上？ って……！』

「『ゴゴウ！？』」



4人が上を見れば、それは偉そうに腕を組み、まっさかさまに降りてくるコゴウの姿があった。何故か笑っているようだ。ただ余裕をこいているのか、ただのバカなのか……。

「はははは！ リーフ、ノア！ また来てやったぞ！」  
着地はふわりと決めたコゴウだった。

が。

「つーー！？」

言葉にならない悲鳴をあげながら、さらにさらに下へ落ちていく。なぜだか分かるだろうか。

まさかとは思うが、そこに落とし穴が仕掛けられていたのだ。聖界に異変が起きる前、子供たちがいたずら半分に仕掛けたのだろう。子供がほるにしては、かなりの深さであった。

「バイバイ、コゴウ」

「助けるー！」

コゴウの声がだんだん遠くなる。それをセトたちはにんまりとみつめていた。

### 第31話 セトの魔法（後書き）

遅くなつてすみません！

長期連載停止になつてしまい、あせりました。

なので、変な文になつてしまいました。（まるでいいわけですね・

・（^^;）

とにかく、次も遅くなるかもしれないので、期待しないで待つてい  
てくださるとありがたいです。

### 第32話 赤面（前書き）

現代グループのあらすじ

地震は震度3にまでおさまり、安心していた二人。

外では黒い月があることにアクアが気づく。アクアは自分がもうすぐ消えることを話し、アオイは希望を持てという。

アクアはアオイを抱きしめようと抱える。しかし、実体の無い彼女は触れられない。

アクアは月に願った。自分の体が欲しいと。

## 第32話 赤面

現代

外の景色はお世辞にも美しいとはいえなかった。聖界でおきている異変がこちらにも影響しているようだった。綺麗に並んでいた田舎の田んぼ道。ところどころにある住宅街。全てが結界に包まれたかのようにバイオレットに染まっていた。

「数時間でこの結果なのさね。行く？ アクア」

「……もちろん、行くだろ？ 平和に過ごしたいし」

窓の端っこのほうに、ここから見るとよく分らないが、今で言う巨大なだんご虫が暴れているように思えた。いや、実際そうだ。

「アクアらしいのさ」

アオイはのりおを揺り起こそうとしている。アクアは小さく、声も立てずに笑った。

「んー……アオイ？ どした」

意外にも寝起きの機嫌はいいものだった。アオイはのりおの手をぐいぐい引っ張って、笑った。のりおは何がなんだかわからなかった。

「ちょっと出かけてくるから、みんなをお願い。あと、通信機がなかったら出ておいて。よろしくなのさね」

「……ん」

アオイはのりおに手を振って、遠くの青い空に飛び出そうとした。アクアもそれを追おうとした。しかし、何かに気がついたアクアはアオイの服を引っ張って止めた。

『まずいいたいことは2つ。1つめ。着替えないの？ 2つめ。誰かが、見てる気がする』

「あーはいはい。着替えないとね。っと、それはともかく……誰か

が、見てる？」

『コゴウかもしれない。アオイは知らないよね。君に出会う前、聖界でボクの後をずっと追ってきた、ストーカー野郎のこと！』

アクアが叫んだ瞬間、通信機が鳴った。のりおは言われたとおり通信機に出た。

「……のりおだ」

「あ、のりおくん？ アオイちゃんかアクアちゃんに代わって？」

セトの声がした。アオイは急いで通信機をうけとった。

「もしもし。どうしたのさ？」

「実は、コゴウがそっちの世界に行ったらしいんです。注意してください」

「コゴウ……ってあの？」

「知ってるんですね。とにかく、注意を怠らないように」

通信機の会話が途切れた。アクアが深刻な表情になり、アオイはアクアの顔色をうかがっている。そんな時、のりおが口を開いた。  
「心配すんな。アオイは俺が守ってやるから。べっ、別に特別な意味じゃないからな！」

『へー、のりおくとアオイってそういうカンケー？』

「ちつがあう！ 変なことじゃないでよ、アクア！」

『顔、赤いけど？』

アクアはアオイの顔をわざと下から覗き込む。そうすると、なおさらアオイの顔が赤くなる。結構いい感じの雰囲気になったとき、空から黒い物体が降ってきた。

「お前ら！ 甘ったるい会話するな！ こっちまで顔が赤くなるわ！」

『コゴウお前……』

アクアが驚いた顔でコゴウの事を見る。そして次の瞬間、何を言うかと思えば！

『髪の毛のびてきたね？ なんか、前よりかっこよくなったよ』

「な、何いってんの、アクア！？」

「っ！？ いきなり何を言う！……私はかなり精神的ダメージが強いから、今日はひとまず退散だ！ 覚えておけよ！」

くるりと後ろを向いたコゴウはさっきとは比べ物にならないくらい赤くなっていて、もう耳まで赤に染まっていた。そして、遠くのほうへ飛び立っていった。

『あーあ、あいつ昔っからああいう言葉に弱いんだよね。よく知ってるし、分かりやすい』

「あー、そういうことか。なんだ、好きかと思ったのさ」

『ないない！ 今はないから！ それより、行こうよ！』

巨大だんご虫はまだ大暴れ。急がないとそこら辺の家が大変なことになるてしまう。

アクアとアオイの2人は変身し、だんご虫のほうへ向かった。

### 第32話 赤面（後書き）

あゝ！ 早めに終わった！ こんなこといつ以来？  
最近小説が早く進みます！

では、また次回！

### 第33話 マイVSコウ！ 過去の想い（前書き）

#### 第2グループのあらすじ

ひのりはマイが追ってきていることに気がつく。マイはついていきたいという。そこで、ついていけるだけの力があるかためす。結果は、一発でひのりの勝ち。後に、ひのりは反省し、マイに謝る。結局、マイは付いていく事になった。

短っ！！



### 第33話 マイVSコゴウ！ 過去の想い

#### 第2グループ

ひのりたちはマイを引き連れ、歩いていった。大雨は止むことなく容赦なくひのりたちをぬらし続ける。マイは、ひのりの近くでひのりのコートを引っ張って歩いている。

ひのりは本当に子供が嫌いだった。実は、隣にいただけで鳥肌が立ちっぱなしだった。マイはそんなことも知らずに、手を握ろうとしている。

「ダメですか……？」

「まっ、まだ無理！ ごめん、マイ」

「いいんですよ。少しずつ、やっていきましょう？」

マイに励まされ、ひのりも少し笑顔になった。ちょっとした衝撃で手と手が触れ合った瞬間、びくつと体が反応した。その敏感さに、我ながら恥ずかしいと思ってしまったのだった。

「来る、あいつが」

「あいつ？ コゴウのこと？ マイ」

「ええ、そうです。後ろを見てください」

ひのりが振り向くと、黒いタキシード姿の男がすごいスピードで接近していた。危険を感じ、マイをロングコートの後ろに隠すひのり。

「ひのり、さん」

「つうう！ 鳥肌なんか、気にするもんか！」

鳥肌よりも人の命のほうが大事に決まっている。

「おい、よく聞け。今回は、困ったことになったな。もうすぐ神が目覚める。生け贄が必要なんだ。誰か、生け贄にならないか？」

コゴウはいたって真顔で話す。コゴウが見つめる先は、なんとマ

イだった。マイはひのりのコートから少し顔を出し、そつと目線を合わせた。

「その娘、生け贄になる気はないか？」

「い、いいえ！」

「そいつが最適なんだがな……まあ、力尽くで生け贄にしてやる」

コゴウは、手に持っていた、巨大な鎌をマイにむけた。そして、にやりと笑って飛び跳ねた。マイはひのりの前に出た。

「マ、マイ？」

「私の力、甘く見ないで下さいね　ちゃんと見ててください、私のことを」

ひのりは戸惑いながら頷き、後ろのほうに避難した。とたんにマイは真剣な表情になり、コゴウを睨みつけた。そして、手のひらをコゴウにむけ、バリアを張った。

そのバリアはかなり強力で、鋭そうなコゴウの鎌でも到底破れそうになかった。

「っ……う、ああ！」

「やはり素晴らしい……聖界にいるときからずっと知っていたよ。この力、私の次ぐらいに素晴らしいかなっ！」

「っ……知って、なんだ」

コゴウをはじめ返すとマイは盾を出現させ、次のコゴウの行動を待った。コゴウも負けていなく、すぐにマイを見た。そして、恐いほどにお互いにらみ合っている。

「神って、誰のこと？」

「すぐわかる。お前が1番よく、知っているんじゃないか？」

「……あの人のことか」

マイが言うあいつとはなんなのか、よく分からなかった。ただ、マイの目の色が変わったことから、

大事な人だったと考えられる。

「行くよ、相棒？」

マイは、盾に話し掛けた。すると、たちまち盾は剣にすがたをか

えた。剣の中央にある宝石は、鈍い蒼に光っていた。徐々に剣全体に光は広がっていく。

「あいつに会いたいか？ それとも、もう忘れたのか？」

「……私は、あの人のこと、忘れられなかった。ずっと、ずっと、この時を待ってた。たとえ変わり果てた姿だとしても、会いたい……！」

マイの瞳に、薄っすらと涙が浮かんた。それを拭いてもせず、まっすぐに自分の剣を見つめていた。

「もうすぐ目覚めるんだ……。我慢しないと、ダメですよね？」

「……勝手に、想っているがいい」

コゴウは鎌をしまい、空高く飛んでいった。マイは、雨でどろどろになっているにもかかわらず、その場に座り込んでしまった。ひのりは急いでマイのもとに行き、抱きかかえた。

「マイ！ 大丈夫？」

「ええ、大丈夫、です」

「そっか。気になってたんだけど、あの人って誰なの？」

「……私が、4歳のときでしたか。名前も知らないあの人と出会いました。家が隣だったから、結構よく遊んでいました。よく遊んでいるうちに、好きになっていたんです。遊ぶだけで嬉しくて、毎日のように遊んでいました。」

そんな時、あの人が突然誘拐されているのが分かりました。そのときは喧嘩していて、遊んでいなくて……。後から、コゴウという変な人が誘拐していた事がわかりました。

5年後に目覚めるって言われて、よく意味がわかりませんでした。コゴウによく聞いてみたら、ここの神様らしき者になっていたらしいんです。

もう死んでいるかもしれないとか、遠いところへ行ってしまったとか、そんな話も聞かされていて、そのたびに狂ってしまい、暴れていました。9歳になったころ、幼かった自分がなくなってきて、本で調べたりして詳しく調べていました。もうすぐで、目覚めるら

しいんです。

まずあったら、名前を聞いておきたくて。次に、喧嘩したこと、謝りたい。最後に、自分の気持ちを伝えたい。だから……目覚めて欲しいんです。

皆さんに反してごめんなさい。神を復活させたら、人間界も、こも滅びてしまうんです。皆さんは復活させたくないって思っているんですから、私はここから抜けた方が良いでしょうね？」

マイは視線を下にやって話した。ひのりは鳥肌のこと忘れて、マイの話に耳を傾けていた。

「あたしは、いいとおもうよ？ その子、連れて帰ればいいんだよ。被害を出さないように考えるから、安心してね。マイは、一途だね」

ひのりは優しく笑いかけた。被害を出さない方法なんて無いに等しいが、やってみるしかないと思ったのだろう。マイも、曇っていた表情が晴れてきた。

「それより……大丈夫なんですか？ 鳥肌」

「え？ わあああああああ！」

ひのりは鳥肌のことなんて忘れていたから、ビックリしていたのだった。

### 第33話 マイVSコゴウ！ 過去の想い（後書き）

どうも！ 遅くなりました。  
次回は遅くなると思います。パワーを使い果たした……。  
ということとで頑張ります。

### 第34話 分かり合うこと（前書き）

#### 第1グループのあらすじ

セトは呪文を考えていた。ルナにも協力してもらい、やっとのことで呪文が決まった。

早速試そうと、次の目的地に向かおうとするが、上空からコゴウが登場する。

コゴウで試そうとも思ったが、コゴウは運悪く落とし穴に落ちていた。

### 第34話 分かり合うこと

#### 第1グループ

「お、ま、え、ら……」

「コゴウ……しぶといやつだな、お前」

あの短時間のうちに、あんなに深い落とし穴を登ってくるなんて執念にしか思えない。魔法など使わず、腕と足の力で登ってきていた。

「セト、と言ったか。お前、生け贄にならんか？」

「わ、私！？　というか、なんの？」

「そろそろ神、もとは人間だったのだから。目覚めるのだ。生け贄にならんと、力尽くで……」

コゴウが鎌を構え、セトは一步後ずさりをする。

「我は天に選ばれしもの。世界に光を、我に波動を」

小さく呟き、セトは杖を手に持った。その様子を察知したのか、コゴウはにんまりと笑った。コゴウの鎌が変形する。マイと戦った形とはまた違うのだ。余計に鋭くなっている。

「というか、あの呪文、杖のへんしんように使っても良いですか？　ルナちゃん」

「ああ、構わないが？」

「私は、生け贄にはなりません」

コゴウがセトに突進してきた。セトがうまく魔法をコントロールできるのか、それが3人には心配なのであった。セトは、4人の中で1番魔法のコントロールが出来ていない。

「っ、コ、ゴ……」

「生け贄になりたくないんだろう？　なら、かかってこい。弱いのならば、生け贄にでもなればいい。さっきも一戦終えてきた。あの

結構強い娘の好きなやつが神らしい」

「……その子、ひのりちゃんが言ってた子かな」

今の状況は、セトが圧倒的に負けている。コゴウが飛び、セトが片ひざについてコゴウを跳ね返す体制になっている。コゴウの目は、本気だ。

「っ、お前が生け贄になれば良い」

「いいや？ 私は生け贄にならない。神に仕えるべき存在だからな？」

「生け贄にならないために……私が、神に仕えてやります。そして、あなたが生け贄になればいい話。決定じゃないの？」

セトはしっかりとコゴウを跳ね返す。パワーだけが傲慢なもので、たとえ男だろうが大人だろうが、関係無し、手加減無しで向かっていく。

「お前では無理な話だろうな。神に仕えるのは、ふさわしい者だけだからな」

「別になりたくないか、ない。私は普通に暮らしたい。みんなと喋って、みんなと笑って。それだけで良いのに……。やっぱり神なんか、仕えたくない」

セトは歯を噛み締め、コゴウをにらみつけた。一息ついてコゴウに突進するセト。コゴウは余裕の顔でバリアを張る。大きな波動を杖から放ち、その波動は、バリアを破るほどの勢いだった。しかし、コゴウのバリアは破れることはなかった。

「お前の望む、普通とはなんだ」

「え……」

いきなりの問いに、構えていた杖をおろすセト。呆然と立ち尽くし、コゴウの瞳を見る。

「私の望む、普通？」

「そうだ。……私も元は普通に、平凡に過ごしていた。しかし、実



の親を目の前で八つ裂きにされたとき。そのときから私は普通に過ごせなくなった。終わり無き、神に仕える生活を強いられた。……私だって普通に生活したい」

コゴウの過去。それはとても悲しく、恐ろしいものだった。セトは、それが自分だったら……と想像し、とても耐えられないと思った。コゴウはそれに耐え、今にいる。その努力をした者を生け贄にすると言ったセトは、ひどく後悔した。

「ごめんなさい……。私、何にも知らなくて」

「……いいんだ。これで、私たちは分かり合えただろう？ さあ、来い。お前の全てをぶつけろ！」

「分かりました。しっかりと相手が分かるように！」

セトはもう一度波動を放つ。先ほどより、一段と強力な。

「つく……まだだ、セト！」

「らあああああ！」

10秒ほど波動を放ち、杖をおろすセト。二回も一度の戦闘で強力な波動を放つと、さすがに疲れる。そこでセトはいったん攻撃を止め、真っ向から勝負に出ることにした。体勢を整え、コゴウに向かって全力疾走をする。

セトの手は硬いサポーターで覆われていて、どんなに強いものを本気で殴ろうとも割れることは無いようになっていて（とても傷ついた場合、ひび割れる場合はある）。コゴウはまたしても強力なバリアを張り、セトの攻撃を受け止めるつもりだ。

セトのパンチと、コゴウのバリア。二つの強力な魔法がぶつかり合い、周りに大きな衝撃をあたえた。辺りは眩しい光に包まれる。ルナたちは何歩か後ずさり、光に包まれなくてすんだ。

「セトッ……！」

ルナの叫びは二人の魔法による衝撃音で掻き消されてしまった。

どのくらいの時間光が発生し、二人はあのままだったのだろう。

あの光はまるで、現れなかったかのように全て消えていた。むしろ、あの光はなんだったのだろう。

「セトちゃん！！ 大丈夫ですか！？」

セトは立っていた。倒れているコゴウを、悲しそうな目で見つめながら。

「そつだよね…… 私たち、分かり合えたんだよね……」

セトは震える声でコゴウに語りかけた。目をゆっくりと閉じると、涙が頬を伝い落ちる。手を目に当て、座り込んで、声を殺して泣いた。

### 第34話 分かり合うこと（後書き）

どうも、遅くなりました！

ここで皆さんにお知らせです！

来年の春、私が中学1年生になったら、新たな連載小説を投稿したいと思っています。内容はもう、ずっと前から考えていて、最近ストーリー的にまとまってきました。

この連載が完結するころ、もしくはその前に連載が始まると思います。

では、よろしくお願いします！

### 第35話 だんご虫（前書き）

現代グループのあらすじ

コゴウは人間界にきた。アオイとのりおの甘ったるい会話を聞いて、赤面し姿をあらわす。そこで戦闘にはいるとアオイは身構えるのだが、アクアはコゴウを言葉だけで追い払う。そして、巨大だんご虫へとむかった。

### 第35話 だんご虫

現代

「うわー、触手付きだよ」

『気持ち悪い……とにかく本体を狙おう』

アオイは弓を、アクアは斧を構えた。

アオイの弓は、先が鋭くとがっている。黒で統一されていて、暗いところで戦闘するときにも目立たないようにになっていた。

『まず、僕の言葉に従って？ セーの合図で触手のほうに切りかかる。君の弓は、矢が無くても使えるように鋭くなつて切れるよね？』

「うん。じゃ、行こうか」

二人は目を合わせ、頷いた。同時に口を開くと、小声で囁いた。

「『セーの』」

そのかけ声と同時に二人は走り出した。アオイは右側、アクアは左側へ。それぞれの武器をかまえ、触手に切りかかった。アクアのほうはうまくいき、一本切り落とすことができたが、アオイはそう簡単にはうまくいかなかった。

「いつ、やあ！ 弓、が……」

触手に巻きつかれたアオイは、その勢いで弓を落としてしまった。必死に足掻こうと足をばたつかせたり、両手で触手を殴りつけたりしていた。少女一人の力では触手は簡単に離れない。そんなことにも気がつかず、アクアは次々に触手を切り付けている。

「ちょ、止め……！ やだ、やめて……アクアア！」

アオイに巻きついた触手は、巨大だんご虫の口付近に運ばれた。

アオイの大きな声に、さすがにアクアも気がついた。アクアは反対側にいるアオイの様子を見に行くことにした。が、誰もいない。

『アオイ！？ 何処にいるの！？』

「上だよ上！！ たっ、食べられそうなんだあ！ 助けて！」

アクアが上を見上げると、触手に捕まりもがいているアオイの姿があった。アクアは斧をかまえた。そう、今からこれを触手に投げるところなのだ。

「えっ！ な、何してんの？」

『これで、触手を切り落とす！ 待つてね、今助けるよ』

「む、無茶だああ！」

そう叫んだときにはもう遅かった。斧がアオイめがけて、すごい勢いで飛んでくる。アオイはもう失神しそうだ。

斧はアオイの髪を少しかすり、通り過ぎていった。触手自体に全く被害は無かったが、その向こうのだんご虫に直撃した。だんご虫はあまり気にしていないようだ。

「あ、あれ？」

『ごめーん！ もう一回やっていい？』

「やめてよ！ 髪かすったよ」

アオイはもう半分泣いている。斧が高速で迫ってくるのは、相当の恐怖だっただろう。それを、もう一度体験する、しかも一発外れているのにもかかわらず。

『信じて、大丈夫。ボクはアクアを殺しはしないよ』

「いや、十分殺しそう」

『まあ、大丈夫だよ。おーい、相棒』

アクアは大声で斧を呼んだ。すると斧は、さっき通ったところをしっかりと通って帰ってきた。もちろん、アオイの髪をかすって。

「……かすったんですけど」

『い、今のはボクじゃない！ 相棒が悪いんだ！』

アクアは首を大きく横に振り、斧を指差した。当たり前だが、斧の反応はない。

『じゃ、今度は成功させる』

アオイはじつと目を瞑り、成功を祈った。

風を切るような音がして目をあけると、斧は触手に突き刺さっていた。触手からは、緑の液体がとめどなく吹き出している。触手が暴れるたびに、裂け目はどんどん広がっていく。

触手の力はすぐに弱くなり、アオイは無事に抜け出せることができた。だんご虫の体につかまってアクアの投げた斧を呼び寄せ、それに乗ってアクアの元へ帰った。

『もう、アオイのばか！ 心配、したよ？』

「ごめん！ もう、心配かけない。役にたつから！」

二人はすぐに視線を巨大だんご虫に戻した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9960c/>

---

楽園～私の居場所～

2010年10月13日21時33分発行